

田 村 遺 跡

- VII -

福岡市埋蔵文化財調査報告書第216集

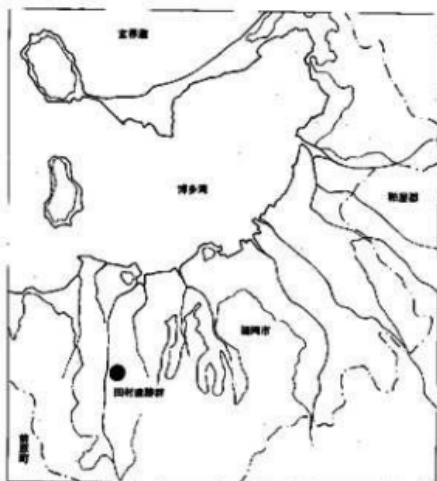
1990

福岡市教育委員会

田 村 遺 跡

— VII —

— 福岡市早良区田所在遺跡群の調査 —



遺跡名号 TMR
調査調査番号 8233

1990年3月

福岡市教育委員会

序

福岡市の西南部に広がる早良平野には、豊かな自然と歴史的遺産が残されています。それらを保護し後世へ伝えていくことは、云うまでもなく私たちの務めであります。

しかし、諸般の事情でそれらが年々失われてきていることもまた事実です。

福岡市教育委員会では、開発によってやむを得ず失われていく遺跡について、事前の発掘調査を行い、記録の保存に努めています。

本書は市営田村団地の建設に伴い、昭和58年度に行った田村遺跡群の発掘調査の成果を報告するものです。

本書が埋蔵文化財への理解と認識を深める一助となり、また研究資料としてご活用いただければ幸いです。

最後に、発掘調査から本書の刊行に至るまで、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対し、心から謝意を表する次第であります。

平成2年1月13日

福岡市教育委員会

教育長 佐藤 善郎

例　　言

1. 本書は福岡市住宅供給公社による市営田村団地建設に伴い、福岡市教育委員会が昭和57年度から58年度にかけて調査を実施した田村遺跡群の第4次調査の報告である。
1. 本書に掲載した遺構の実測は横山邦繼、二宮忠司、濱石哲也、渡辺和子、赤司善彦、岡部裕俊、上敷領久、緒方俊輔があたった。遺物の実測は二宮、濱石、林田憲三、久保寿一郎、大庭友子が行なった。
1. 遺構・遺物の製図は二宮、濱石、林田、大庭、藤村住公恵があたった。
1. 写真撮影は現場を二宮、横山、濱石が、遺物を二宮、大庭、林田が行なった。
1. 本報告書の作成にあたっては、青柳恵子、平田ミサ子、尾崎京子、斎藤美紀枝、藤崎洋子、内山孝子、渡辺ちず子、京坂ハツミ、亀井律子、牛尾美保子、日名子節子、戸渡洋美、藤信子、木村裕子、島崎純子、神田洋子、西島信枝、前田みゆき、内倉まゆみ、真名子順子の協力を得た。
1. 遺構の表記は、S B-獨立柱建物、S E-井戸、S C-S K-土坑、S D-溝、S X-その他の遺構と略し、その後に番号をつけた。
1. 掲載遺物は001からの通し番号で、823300を頭に付けると遺物登録番号となる。なお文中では001-099の0を紙幅の都合から省略した。また147-150は登録を行なったものの、本書では図・文とともに触れなかった。
1. 遺物写真的番号も本文と一致する。
1. 掲載タイトルの()内の数字は縮尺を示す。
1. 遺構図に用いた方位は磁北である。
1. 本報告に關わる図面、写真、遺物などの一切の資料は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵され保管、公開される予定である。
1. 本書の執筆は4を二宮、他を林田の協力を得て濱石が行なった。
1. 本書の編集は、濱石が行なった。

本文目次

本文頁

1 はじめに	1
2 遺跡の位置と環境	1
3 第4次調査の概要	3
4 純文時代の遺構と遺物	5
1) 検出遺構	5
2) 出土遺物	6
5 平安時代の遺構と遺物	14
1) 掘立柱建物	14
2) 井戸	22
3) 土坑	29
4) 溝	47
5) 方形周溝遺構	51
6) その他の遺構	51
6 おわりに	52

図版目次

図版 1 1 a 区上層全景 (西から)	2 a 区下層全景 (東から)
図版 2 1 b 区上層全景 (北から)	2 b 区下層全景 (南から)
図版 3 1 c 区上層全景 (西北から)	2 c 区上層全景 (東から)
図版 4 1 S B01・02・03	2 b 区掘立柱建物群
3 S B16	4 S B18
図版 5 1 S B22・23	2 S B06
3 S B07・14	4 S B09・10・11・12・15
図版 6 1 S E01	2 S E02
3 S E03	4 S E09
図版 7 1 S E11	2 S C01
3 S C02	4 S C03
図版 8 1 S C04・05・06	2 S K35
3 S X101 (方形周溝遺構)	4 S X02 (埋甕)
図版 9 出土遺物 I	

- 図版10 出土遺物Ⅱ
 図版11 出土遺物Ⅲ
 図版12 出土遺物Ⅳ
 図版13 出土遺物Ⅴ
 図版14 出土遺物Ⅵ

挿 図 目 次

本文頁	本文頁		
第1図 周辺の道路(1/5万).....	2	第19図 SE03-04-05-06-07-08実測図(1/40).....	25
第2図 田村遺跡群全体図(1/8000).....	3	第20図 SE03-04-05-06出土遺物(1/3、1/4).....	27
第3図 縄文時代の遺構(1/20、1/40).....	5	第21図 SE09-10-11-12-13-14-15実測図(1/40).....	28
第4図 出土縄文土器1(1/3、1/4).....	8	第22図 SE09-10出土遺物(1/3、1/4).....	29
第5図 出土縄文土器2(1/4).....	9	第23図 SC01-02実測図(1/40).....	31
第6図 出土石器1(1/2).....	10	第24図 SC03-04実測図(1/40).....	32
第7図 出土石器2(1/2).....	11	第25図 SC01-02-03-04出土遺物(1/3、1/4).....	33
第8図 出土石器3(1/2).....	12	第26図 SC07実測図(1/40).....	34
第9図 出土石器4(1/3).....	13	第27図 SC05-06-07出土遺物(1/3).....	35
第10図 SB01-02-03-04-05実測図(1/100).....	16	第28図 SK05-06-07-08-13-15-16-17実測図(1/40).....	38
第11図 SB06-08-09実測図(1/100).....	17	第29図 SK18-19-21-23-29-30-31-33実測図(1/40).....	39
第12図 SB07-13実測図(1/100).....	18	第30図 SK34-35-36-37-38-40-43-45実測図(1/40).....	41
第13図 SB10-11-12-15実測図(1/100).....	19	第31図 SK05-06-08-09-11-15-17-19-23-34出土遺物(1/3).....	42
第14図 SB14-16-17-19実測図(1/100).....	20	第32図 SK35出土遺物(1/3).....	43
第15図 SB18-20-21-22-23実測図(1/100).....	21	第33図 SK44-45-47-48-49-50-51-52-53-54-55-56-57実測図(1/40).....	45
第16図 捶立柱建物・ピット出土遺物(1/3).....	22	第34図 SK43-44-45出土遺物(1/3、1/4).....	46
第17図 SE01-02実測図(1/40).....	23	第35図 SD02-08-14-37-39出土遺物(1/3).....	49
第18図 SE01-02出土遺物(1/2、1/3).....	24	第36図 SX101実測図(1/40).....	51

表 目 次

第1表 田村遺跡群発掘調査一覧.....	4	第2表 捶立柱建物一覧.....	15
----------------------	---	------------------	----

付 図

付図1 第8地点上層遺構配置図(1/200)

付図2 第8地点下層遺構配置図(1/200)

1 はじめに

1979（昭和54）年、福岡市建築局から文化課（現埋蔵文化財課）に対し、早良区（当時西区）大字田の市営住宅建設予定地内の埋蔵文化財の有無について照会があった。予定地は前年行った遺跡分布調査で田村遺跡群としてすでに登録されていた。建設が数万m²にのぼることから、文化課では建築局、市住宅公社と協議をもち、同年9月から11月にかけて試掘調査を行った。その結果をもとに、一部計画を変更して遺跡のないところから建設が始まった。遺跡にかかる部分は1980年12月から発掘調査を開始した。以後3ヶ年（3次）にわたって発掘調査を行った（第1表参照）。

今回の報告は1983年1月20日から6月15日までの第3次調査（第8地点）を対象としている。なお第8地点の北側に当る第9地点も同時に試掘調査を行ったが、遺構・遺物の検出はなく、調査対象からはずした。

今回の発掘、整理体制は以下のとおりである。

調査委託 福岡市住宅供給公社

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課第1係

柳田純孝（課長） 飛高憲雄（係長） 横山邦雄・二宮忠司・濱石哲也（調査担当）

調査補助 渡辺和子（現筑紫野市教育委員会） 赤司善彦（現九州歴史資料館） 岡部裕俊（現前原町教育委員会） 佐藤一郎（現福岡市教育委員会） 上敷領久

整理補助 林田憲三（中村学園大学講師） 大庭友子 久保寿一郎 村上かをり 藤村佳公江
発掘、整理作業にあたっては地元の方々をはじめ多くの人々のご協力を得た。

2 遺跡の位置と環境

玄界灘をへだて朝鮮半島さらには大陸と面する福岡市には、西から糸島（今宿）、早良、福岡、柏屋の大小平野が、北の博多湾を囲むように広がる。これらの平野は山塊、丘陵によって分断され、各々が独自の自然、歴史環境を備えている。早良平野は福岡市の西南部にあたり、南は佐賀県との境をなす背振山脈に阻まれる。この山脈に源を発する室見川が平野中央を北流し、博多湾へとそぐ。平野には第三紀丘陵、洪積台地が点在し、また北辺には砂丘が形成されている。しかしその多くが、室見川を中心とした河川の沖積地となっている。

田村遺跡群はこの早良平野の中央南側、標高15~17mの北側に低い沖積地に立地する。行政的には福岡市早良区（改区前は西区）大字田で、国土地理院発行5万分の1地図「福岡」の北から28.7cm、西から15.5cmを中心とした一帯に広がる。開発が及ぶ以前は、一部集落が点在する他はすべて水田であった。

周辺にはすぐ南の四箇遺跡群、室見川をへだてた西には吉武遺跡群があり、また平野内には

下水道帶



第1図 頭辺の遺跡 (1/5万)

◎遺跡研究◎遺跡圖古繪



第2図 田村遺跡群全体図 (1/8000)

先土器時代から近世にいたる膨大な遺跡が分布している（第1図）。今回は頁数の制約もあり遺跡の概要などについては各々の報告に譲ることにする。

3 第4次調査の概要

田村遺跡群の発掘調査は1978年の第1次（高柳）以来、1989年末までに9次にわたって行なわれている（第2図、第1表）。うち第2、3、4次が市営田村団地建設に伴うもので、今回で団地関係の報告は一応終了する。

第4次調査は第8地点で行なった。場所的には第1次調査地点のすぐ西、第3次調査（第3・4・5地点）地点から1ブロック隔てた東側にあたる。1982年試掘調査で遺構・遺物を確認し、1983年1月から調査を開始した。まず対象地を磁北の方向をとる10mメッシュで区画し、これとは別に調査の進行にあわせてa、b、cの大区を設定した。本報告では位置関係などは大区のみを使用した（付図1・2参照）。

調査地点は30~40cmの盛土に覆われており、その下に青灰色砂質土（耕作土）が15cmほどあ

調査次数	調査番号	調査地点	調査原因	調査面積	調査期間	報告
1	7803	高 梶	学校建設	3,000m ²	1978.10.11~12.2	福岡市報第70集 1981
2	8034	第1地点	同地建設	2,650m ²	1980.12.5~1981.4.14	福岡市報第89集 1982
	8035	第2地点				福岡市報第104集 1984
	8144	第3地点				
3	8145	第4地点	同地建設	12,820m ²	1981.4.22~1982.5.15	福岡市報第167集 1987
	8146	第5地点				
4	8233	第8地点	同地建設	8,500m ²	1983.1.20~6.15	本 報 告
5	8404	第10地点	学校建設	17,000m ²	1984.7.1~1985.7.6	福岡市報第192集 1988
						福岡市報第200集 1989
6	8429	第11地点	店舗建設	800m ²	1984.8.1~9.10	未 報 告
7	8447	第12地点	道路建設	1,800m ²	1984.12.1~12.29	福岡市報第168集 1987
8	8847	第13地点	道路建設	700m ²	1988.12.2~1989.3.11	未 報 告
9	8934	第14地点	公民館建設	661m ²	1989.7.5~8.16	未 報 告

第1表 田村遺跡群発掘調査一覧

る。この耕作土を除去した面が黄褐色砂質土の遺構検出面となる。この層は厚さ5cm前後と薄く、場所によってはみられない不安定な堆積である。古代末の遺構はこの面から確認できたため、これを上層としてとらえた。この下には茶褐色砂質土があり、縄文時代を中心とした遺構・遺物が出土した。これを下層とした。しかし下層の遺構検出の際、上層での掘り残しのピットなどが多く認められた。本報告にあたっては確実に上層の掘り残しと分かれる遺構は上層の全体図(付図1)、それ以外は下層の全体図(付図2)に入れている。

調査はa区上層から始め、c区上層に移り、さらにb区上層へと進んだ。b区上層と併行してa区下層を調査し、最後にb区下層を行い、6月15日終了した。c区でも下層の遺構検出が予想されたが、諸事情で今後の調査となつた。

検出した遺構・遺物は縄文時代早期から近世におよぶ。縄文時代は遺物の出土量に対して遺構の検出は少なく、埋甕、溝、ピットなどにとどまる。時期的には後・晚期が多い。弥生・古墳時代の遺構・遺物はほとんどみられず、SD01、10の溝、b区下層面で検出した自然流路などにとどまる。遺物の量もきわめて少ない。平安時代の遺構は11世紀代を中心とした集落を検出した。掘立柱建物、井戸、土坑、溝などの遺構と土師器、黑色土器、瓦器、輸入陶磁器などの遺物がある。12世紀以降の遺構・遺物はほとんどなく、近世の畦などを検出したにとどまる。今報告では縄文時代と平安時代の遺構・遺物を中心にとりあげ、他の時代のそれについては適宜ふれることにする。

註 力武卓治・横山邦雄「高柳遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第70集1981、濱石哲也(編)「田村遺跡Ⅰ~Ⅳ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第89集1982、濱石哲也(編)「田村遺跡Ⅴ~Ⅶ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第104集1984、濱石哲也(編)「田村遺跡Ⅷ~Ⅸ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第167集1987、佐藤一郎(編)「田村遺跡Ⅹ~Ⅺ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第168集1987、佐藤一郎(編)「田村遺跡Ⅻ~Ⅼ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第188集1988、二宮忠司・濱石哲也・佐藤一郎(編)「田村遺跡Ⅽ~Ⅿ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第200集1989

4 繩文時代の遺構と遺物

田村遺跡群は、縄文時代から中世までの遺構が同一面で検出される。このため縄文時代・弥生時代の遺構のほとんどが中世の遺構によって削平・破壊を受けている。第3図に示した縄文時代後期の埋甕の検出状態でも口縁部が削られ辛うじて約1/3程度が残る程度である。ただ遺物は各遺構から二次堆積の状態で出土している。

1) 検出遺構

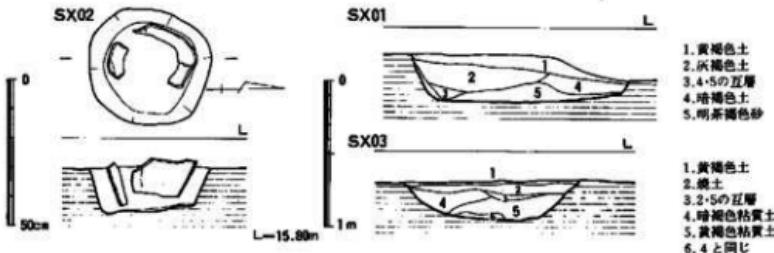
縄文時代の遺構は中世までの削平と遺構の重なりによってそのほとんどが消滅しているのが現状である。遺物からは縄文時代早期、前期、中期、後期、晩期の時期が認められるが、遺構は後期、晩期のものを僅かながら検出したにとどまった。遺構としては、性格不明な土坑、溝状遺構、柱穴状遺構、旧河川状遺構を検出した。しかしながらそれ等の性格を把握することは削平が著しいことと中世の遺構との重なりにより非常に困難であった。

不整形な土坑状遺構（SX01～SX09） a区より検出した。形状が一定せず、浅い掘り込みを呈する。縄文土器を出土する遺構にだけ番号を付したが、同様の形状を持つものがb区にも検出されている。形状も土坑状のもの、溝状のもの、三角形、円形を呈するものなど一定しない。またa区のSX03のように焼土が厚く堆積している土坑もある。

埋甕（SX02） a区より検出した。粗製深鉢を立てた状態で、底部は打欠いている。約1/3程度残存する。土坑は40cmの円形を呈し、深さ15cmを残存する。この状態から30cm程度の削平が考えられる。

柱穴状遺構 縄文土器が出土している柱穴状の遺構は175であるが、この内40が中世の遺物とともに出土している。このことから時期的には、中世の柱穴と考えられる。他の柱穴は時期的には縄文と考えられるが、遺構としてのまとまりはない（削平のため堅穴住居跡の柱穴だけが残る場合を考えてみたが、確定することは非常に困難であった）。

包含層 黄褐色シルト土から遺物が出土した。遺構精査時にその殆どが出土している。また自然流路（旧河川）中からの遺物の出土もあった。



第3図 縄文時代の遺構(1/20, 1/40)

2) 出土遺物

縄文時代の遺物は多量は出土したが、その殆どが細片で図示できたものは土器39点、石器90であった。遺構出土の遺物は縄文時代後期のものが殆どで、早期、晚期の遺物は、包含層か旧河川からの出土である。第9図137~146の石器は図面の都合上中世の石器を記載した。

土器（第4・5図）

30は早期の楕円押型文土器の深鉢形土器である。楕円の長軸1.0cm、短軸0.6cmの大型である。内面に貝殻条痕を施す。b区包含層から出土した。

1~3は後期の深鉢で、1は環状に粘土帯を巻き他は、縄文を施す。2、3は山形口縁を呈するものと考えられる。H状、鼓状の突起を配し、胴部には貝殻条痕を施文する。4~9、36、37は晩期の黒色研磨土器で、4、37が深鉢、他は浅鉢である。10、11、13~17は晩期の突帯文である。12は口唇部に粘土を折り曲げている。ただし無文土器とは異なる。18~29、31~35、38、39は後期の粗製土器、半精製土器、精製土器である。31はa区より検出した理窓で粗製深鉢。33はc区西側断面より口縁部を下にして出土した完形の鉢で、土坑状遺構より出土した。包含層から3、10~15、18、19、22、23、柱穴から1、5、9、16、21、25、29、34、36、37、39、他は旧河川状遺構より出土。

石器（第6~9図）

50~70は石鎌。縄文後期に見られる剥片鎌が主体を占めているが、54は両面に研磨の痕跡が認められる局部磨製石鎌である。52、60は側刃中央部に反りを持つ。60、61、66~69はサヌカイトを石材としている。他は黒耀石を石材とする。71、72はつまみ形石器である。両側刃からリタッチを加え、その部分から切断している。素材は縦長剥片で両方とも打面側を残している。

73、74は、楔形石器である。断面がレンズ状を呈し、一側刃が階段状剥離を持つ。

75~83は切(折)断剥片である。側刃部にリタッチを加え切断するもの78、79、81と折断するものがある。側刃部に使用痕が認められサイド・ブレイドとしての可能性が大きい。84の剥片はハリ質安山岩製で、ただ1点出土した。

85はサヌカイト製の縦長石匙で、側刃部に自然面を持つ。

86は石核再生剥片を再利用したエンド・スクレーパー、87、88は石核再生剥片である。

89~99は黒耀石製の石核で、そのほとんどが小型である。剥取方向も1方向から3方向のものが主体で、良質の剥片を剥取したとは考えにくい。田村遺跡Vの報告で記載したように類似鉛桶技法より剥取したものが石鎌、石刀等に使用されたと考えられる。これらの石核から剥離された剥片はサイド・ブレイド等に使用されたものと考えられる。

100、101はサヌカイト製の石核であるが、側刃部に使用痕が認められることからスクレーパーの可能性もある。

102~105はサヌカイト製のサイド、エンド・スクレーパーで、102、103がサイド、104、105

がエンド・スクレーパーである。

106～127は黒耀石製の縦長剥片である。特に縦長を記載したが、横長の剥片も多量に出土している。縦長剥片の両側辺には使用痕が顕著に認められる。

128～131は打製石斧である。128は刃部のみであるが、断面からして太型石斧の形状を呈する。

129は縄文後期によく出土する石斧で土掘り具としての用途を考えられる。

130、131も同様の形状を呈するが断面が厚く、129の用途とは異なるもので、裁断器的用途を考えられる。

132は磨製石斧の敲打段階に剥離されたもので、弥生中期の大型蛤刀石斧片と考えられる。

133、134は縄文時代によく出土する蛇紋岩製の磨製石斧で、丁寧な研磨が行われている。133は一部火を受けた痕跡が認められ、表面がかなり剥落している。

135は安山岩製のコンケーブ・スクレーパーである。刃部の形状に丸みを持つもので、両面からの剥離によって作り出されている。

136は弥生時代の石庖丁である。これも火を受けた痕跡を持つ。穿孔は背側より主に行われている。

137～146は中世の遺構に伴う石器である。

137、138は磨石と考えられ、とくに138は端部のみをよく使用し、擦り潰すのに非常に適している。

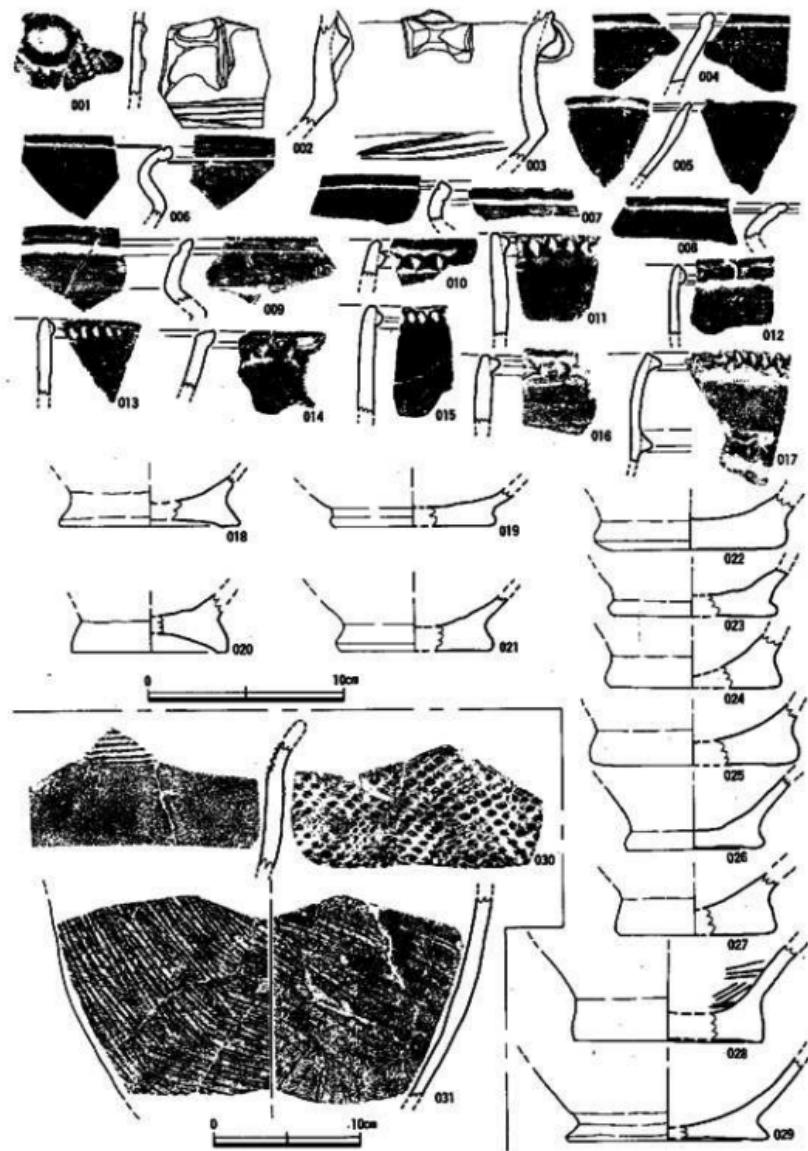
139、140、142、143、145、146は砥石で、使用工程に合わせて石材が異なる。139、145は砂岩。140は粘板岩。142は安山岩。143は凝灰岩。146は珪岩である。砂岩は荒磨き用、粘板岩、凝灰岩、安山岩は中磨き用、珪岩は仕上げ用として使用されたと考えられる。

141は滑石製の石鍊である。

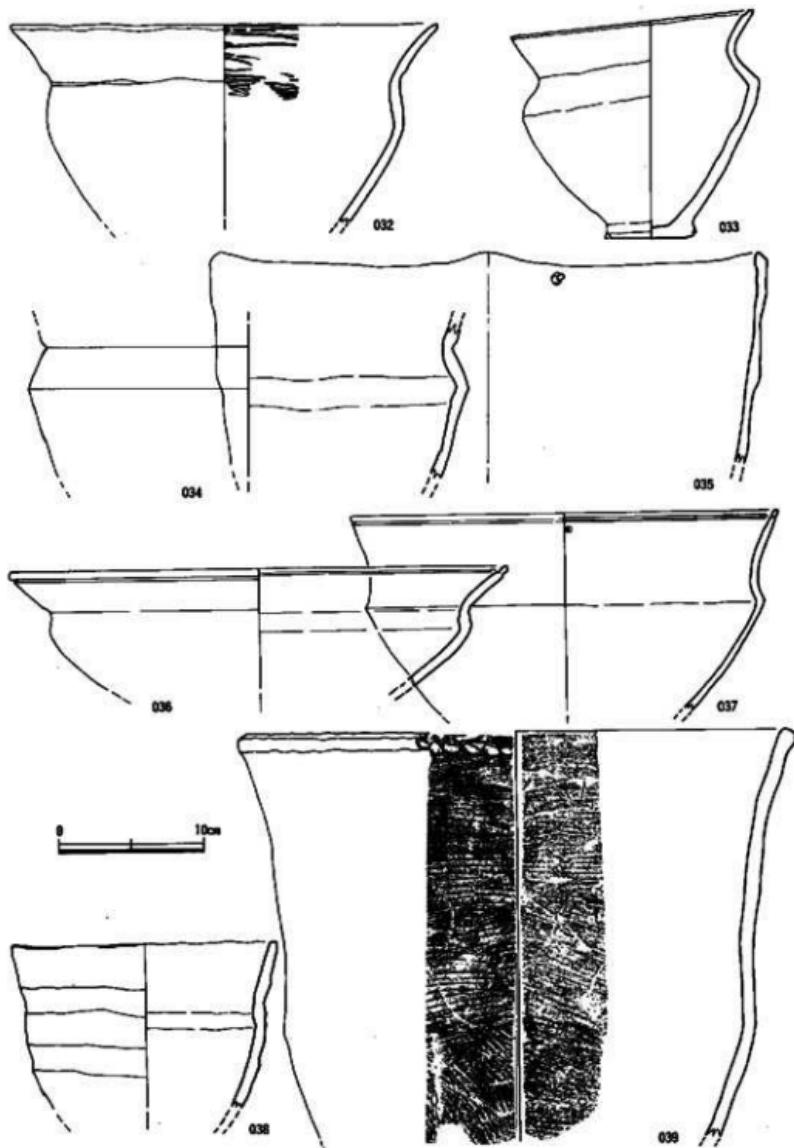
144は凝灰岩であるが、両面の中央部に凹みがある。これはこの石を切断する目的か、この部分を利用して刃部の磨き出しを行った可能性があるが、明確には判断できない。

石材は55、59、64、69、70、85、100～105がサスカイト、84はハリ質安山岩、128、129、131、135は安山岩、130、132は玄武岩、133、134は蛇紋岩、136は頁岩、137は砂岩、138は凝灰岩で、他は黒耀石である。

出土地点と造構は8aの包含層より56、64、70、129、134、S X01より107、117、118、120、S X04より54、S X05より68、126、S X09より63、67、103、S D02より50、85、Pitより66、69、74、75、76、79、89、91、94、112、116、123、128、131、137、141、144が出土している。8bの表土より81、105、109、115、124、132、146、包含層より133、旧河川より61、78、83、95、119、122、127、S D21より80、S D26より87、S D30より72、125、S D38より59、S D39より102、S C03より65、Pitより58、60、90、110、114、121、S K38より106、S K54より55、57、77、84、86、104、S K55より111、S K57より100が出土した。8cの表土より52、71、



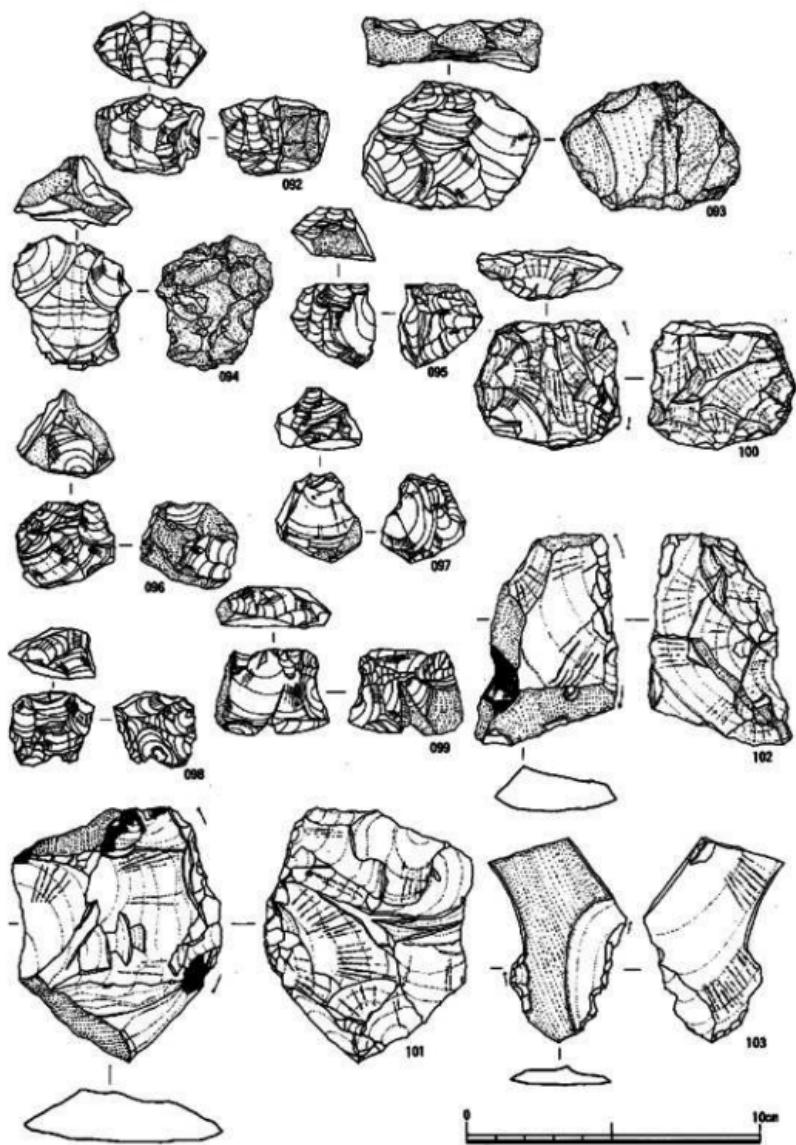
第4図 出土縄文土器(1/3, 1/4)



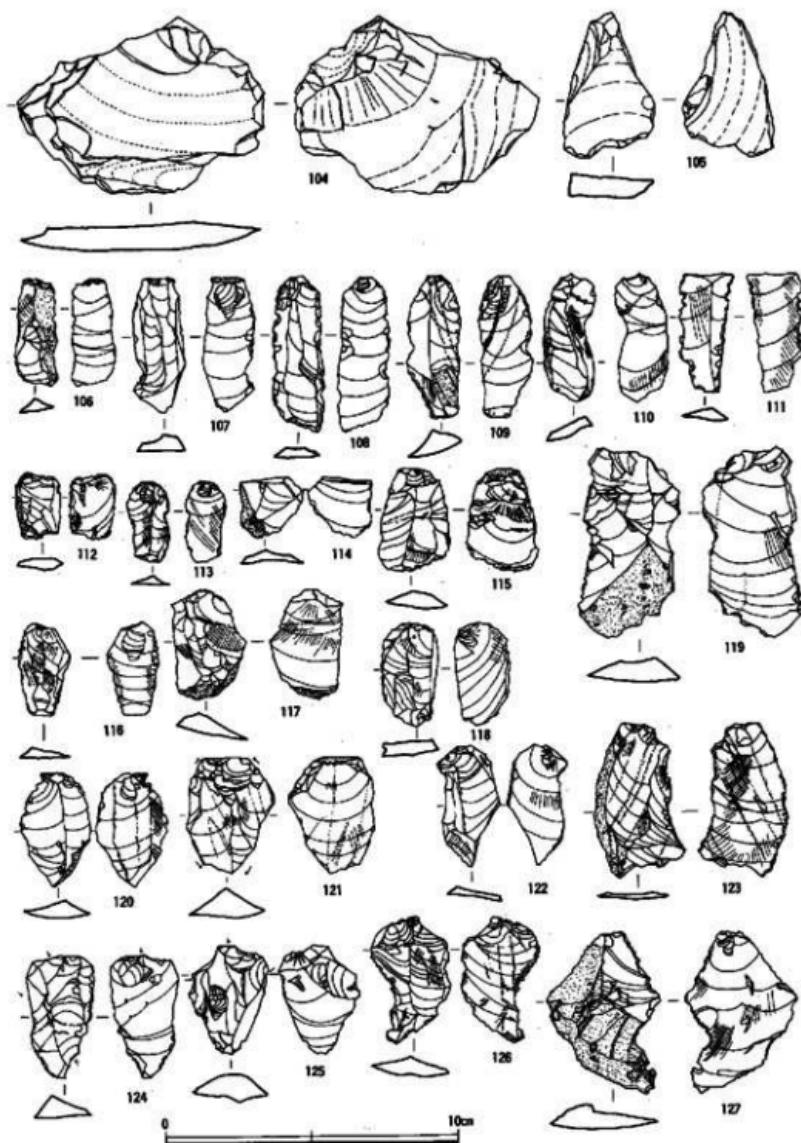
第5図 出土縄文土器2(1/4)



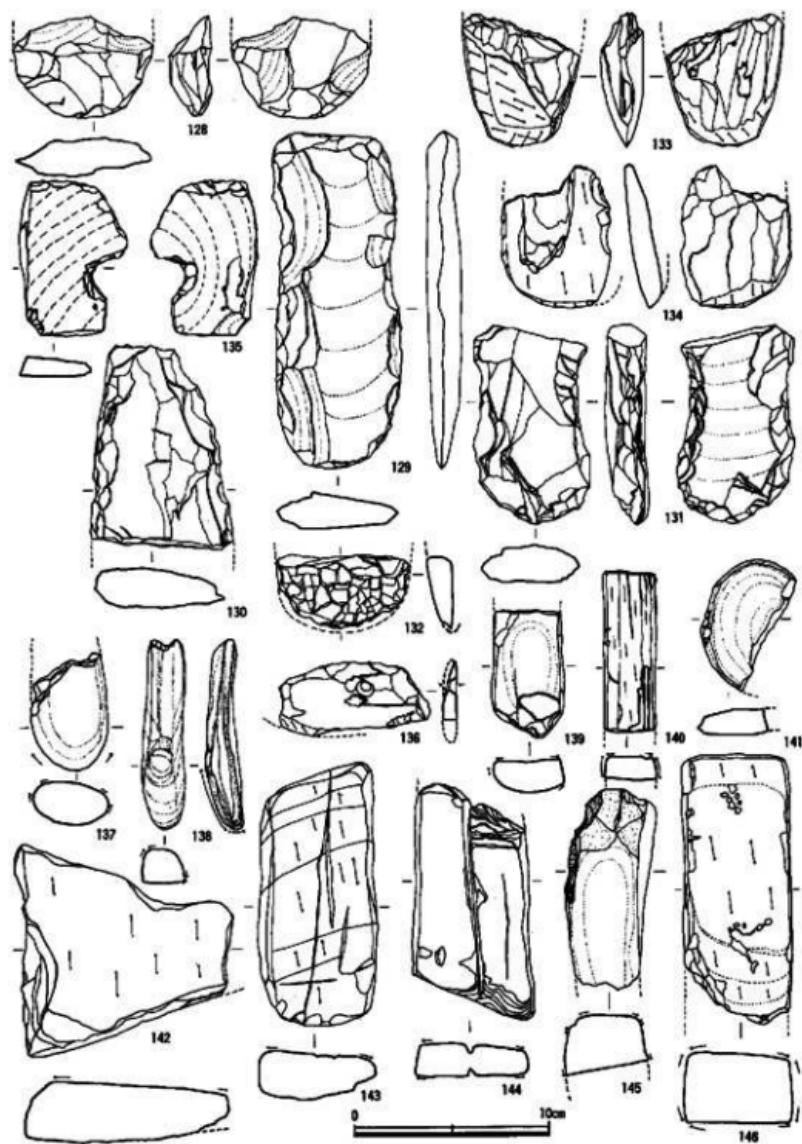
第6図 出土石器1(1/2)



第7図 出土石器2(1/2)



第8圖 出土石器3(1/2)



第9図 出土石器4(1/3)

73、82、88、92、93、130、136、S D 09より54、99、S D 10より96、108、113、S D 13より98、S D 19より135、S K 11より51、S E 04より62、143、S E 07より101、S X 03より97、S C 01より138、140、Pit より142、145が出土している。

5 平安時代の遺構と遺物

1) 堀立柱建物

a区5棟（S B 01～05）、b区8棟（S B 16～23）、c区10棟（S B 06～15）のあわせて23棟検出した。発掘区外にかかるS B 04、05、15を除けば、S B 03、20、21の3棟が2×2間、他はすべて2×3間の身舎をもつ。S B 04、05、15にしても2×3間の可能性が高い。東西棟はS B 04、05、07、13の4棟だけで、残りは南北棟となる。すべての建物が梁または桁をほぼ南北にとる。柱穴は径30cm前後のものが多く、柱痕跡を確認できたものもある。また穴底に小石を1、2個置いて、根石とする例も見られた。個別建物の形態、計測値については挿図および第2表に譲り、特徴ある建物について以下ふれる。なお確認した23棟の他にも柱痕跡をもつピットがあり、まとめきれなかった建物が若干あるものと考えられる。

S B 07は今回検出した建物中最大規模の身舎をもつ2×3間の東西棟である。床東があり、四面に庇をめぐらす。また南北面では庇に沿って浅い溝（S D 13）が掘られている。西側は建物と平行な段落ちがあり、建築の際の整地をうかがわせる。その南に位置するS B 06は2×3間の身舎だけの建物で、西側と南側を溝（S D 11とS D 12）で開っている。また南梁とS D 12の間には東西方向に2列の柱穴がみられ、この建物に付随した施設と考えられる。

S B 10と11、S B 12と15は建て替えの状況を示したものであろう。S B 10を立て替えたS B 11は、身舎の規模は若干小さくなっているものの、東北隅を除き囲い解らしき柱穴がめぐる。

總柱の建物はb区にだけ認められる。S B 16、17、18、19は2×3間、S B 20、21は2×2間の總柱建物である。S B 18は東側に庇をもつ。またS B 19は南側1間が狭く、2×2間の南庇付建物の可能性もある。

S B 22はS C 05、S B 23はS C 06をそれぞれ囲むようにして構築された2×3間の建物である。この2棟は下層面の調査の際確認したものであるが、S C 05の調査時には、その中にあるS B 22のP 2、3を土坑に伴うものとしてとらえていた。土坑そのものの性格は別項でふれるが、この堀立柱建物は竪穴の覆屋の可能性が高い。

柱穴からの出土土器のほとんどが細片であるのに対し、S B 06のP 5、S B 17のP 9、S B 20のP 5では1/2～2/3残存する土師器が出土している。また建物に伴わないピットから完形の土師器が出土している。これらは堀立建築の際の祭祀に用いられたものと考えられる。

出土遺物（第16図） 各建物からの出土遺物は第2表に示した。表中、土は土師器、黒A・Bは黒色土器のA類・B類、須は須恵器の略で、器種が分かるものについては（ ）の中に記

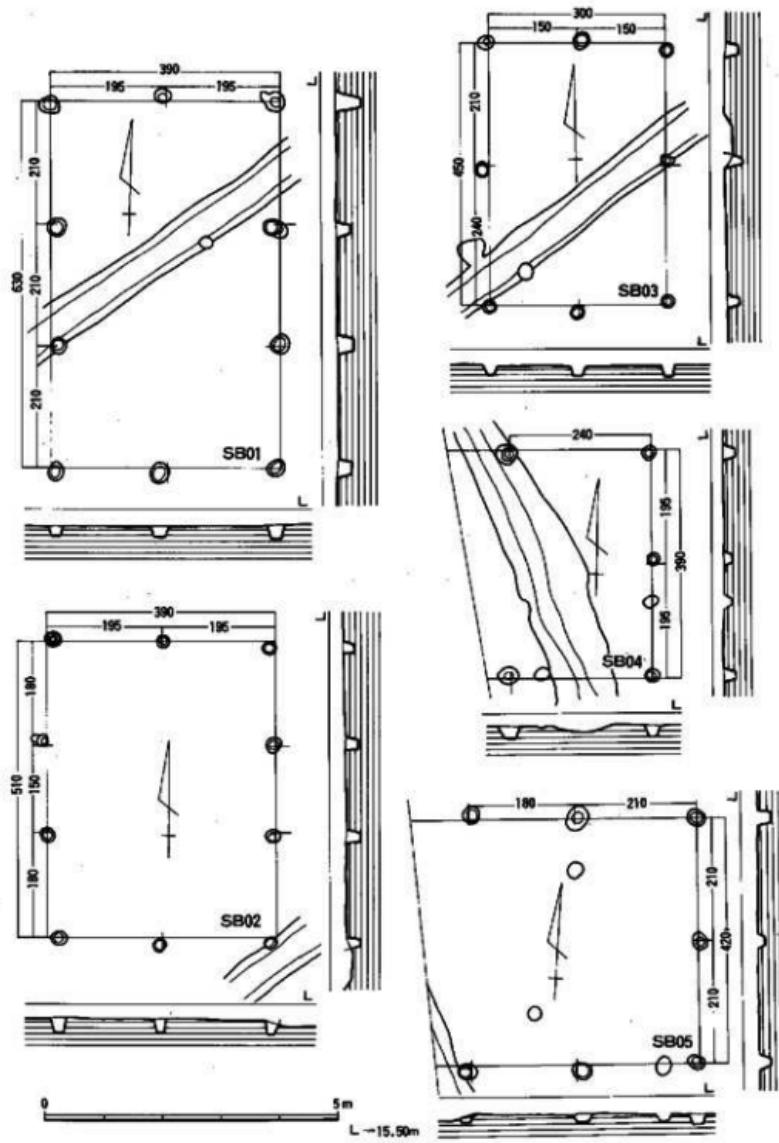
No	規模	棟向	梁		桁		建物方位	床面積(m ²)	その他の施設	出土遺物
			実長(cm)	柱間寸法	実長(cm)	柱間寸法				
01	2×3	南北	390(13)	6.5	630(21)	7	N	24.57		土(皿)、黒A・B
02	2×3	南北	390(13)	6.5	510(17)	6・5・6	N	19.89		土(皿)、黒B
03	2×2	南北	300(10)	5	450(15)	7・8	N-1°-E	13.5		土(皿)、黒B
04	2×?	東西	390(13)	6.5	240+ε	7・?・?	N-2°-W	—		土、黒B
05	2×?	東西	420(14)	7	390+ε	7・6・?	N-45°-W	—	西と南に溝	遺物なし
06	2×3	南北	360(12)	6	570(19)	6・6・7	N-6°-E	20.52		土(皿・椀)、黒A・B、須、白磁
07	2×3	東西	420(14)	7	660(22)	7・7・8	N-7°-E	27.72	四面庇、床東	土(皿・椀)、黒A、青磁
08	2×3	南北	330(11)	5.5	540(18)	6・6・6	N-3.5°-W	17.82		土、黒B
09	2×3	南北	390(13)	6.5	660(22)	7.5・7・7.5	N-25°-E	25.74		土(椀)、白磁(III)
10	2×3	南北	360(12)	6	630(21)	7・7・7	N-5.5°-W	22.68		土(椀)、黒A・B、白磁(椀)
11	2×3	南北	390(13)	6.5	570(19)	6・6・5.5	N-3.5°-W	22.23	圓い壁?	黒A
12	2×3	南北	360(12)	6	630(21)	7・7・7	N-1°-W	22.68		遺物なし
13	2×3	東西	360(12)	6	660(22)	7.5	N-3°-E	23.76		土(椀)、黒B
14	2×3	南北	420(14)	7	630(21)	7・7・7	N	26.46		土、黒A・B、須、青磁
15	2×3	南北	330(11)	5.5	630(21)	7・7・7	N-1.5°-W	20.79		遺物なし
16	2×3	南北	390(11)	5.5	540(18)	6	N-4°-W	21.06	鰐柱	土(皿・椀)、黒A・B
17	2×3	南北	390(11)	5.5	600(20)	7・6・7	N-0.5°-W	23.4	鰐柱	土(皿・椀)、黒A
18	2×3	南北	420(14)	7	600(20)	7・7・6	N-0.5°-E	25.2	鰐柱、東庇	土(皿・椀)、黒A、須、褐色陶器
19	2×3	南北	390(11)	5.5	600(20)	7.5・7.5・6	N-1.5°-E	23.4	鰐柱	土(皿)
20	2×2	東西	420(14)	7	390(13)	6・7	N	16.38	鰐柱	土(皿・椀)、黒B
21	2×2	東西	420(14)	7	390(13)	7・6	N-1.5°-E	16.38	鰐柱	土、黒A
22	2×3	南北	390(11)	5.5	600(20)	6.5・7.5・6	N-1°-W	23.40	建物内にSC05	土(皿・椀)、黒A
23	2×3	南北	420(14)	7	510(17)	5・6・6	N-0.5°-W	21.42	建物内にSC06	土(皿・椀)

第2表 掘立柱建物一覧

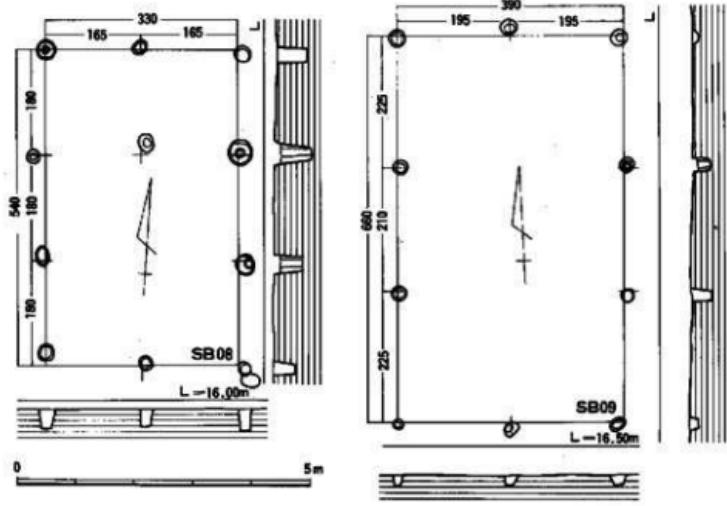
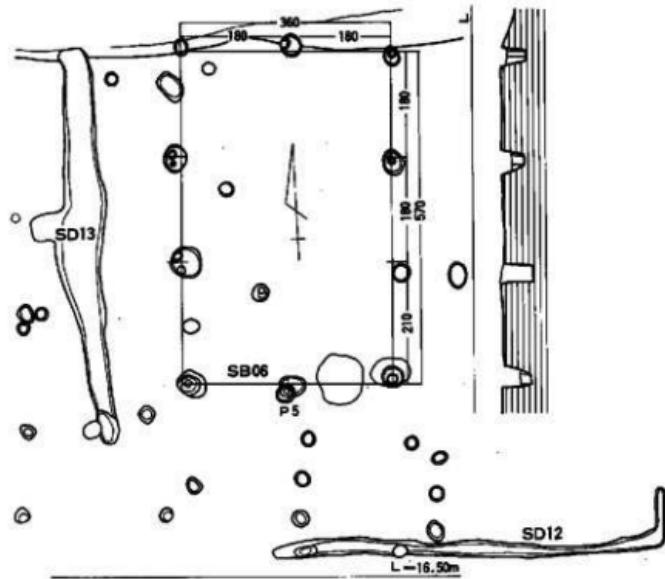
第1-3表の()内は尺。柱間寸法も尺。1尺=30cmとして計算

した。縄文、弥生土器の細片も出土しているが、表中には省略した。また第16図には建物に伴わないピット出土の遺物もあわせて掲載した。

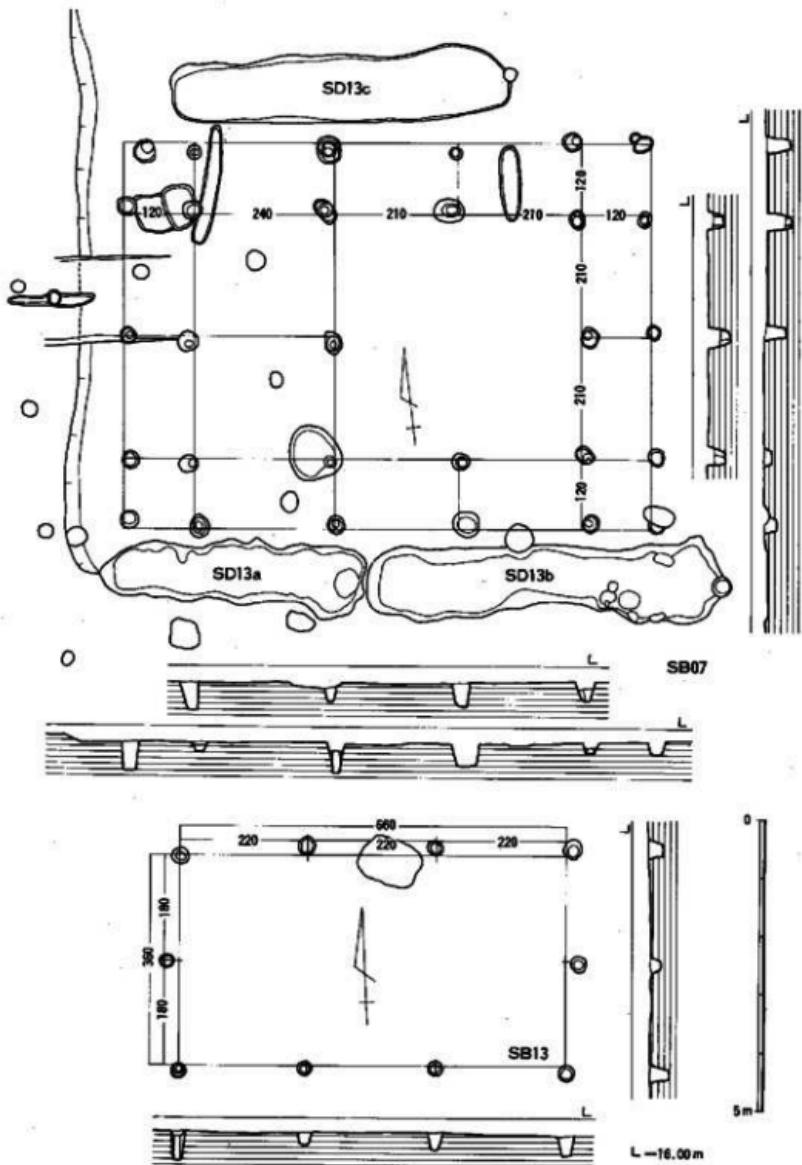
151-153はSB06出土の土師器皿。復元口径9.7-10.3cm、器高1.1cm前後。底部はすべてヘラ切りで、152には板状圧痕が残る。154、155はSB17出土の土師器碗と杯。155は口径12.2cm、器高3.7cmをはかり、底部はヘラ切り。156はSB20出土の底部ヘラ切りの土師皿。復元口径10.1cm、器高1.8cm。157-161は掘立柱建物以外のピットから出土したもの。157、158、160は完形の土師皿。口径9.6-10.6cm、器高1.5cm前後。底部はいずれもヘラ切り。159はSB06内の2つのピットから出土したものが合わさって、ほぼ完形となった土師器杯。口径12.2cm、器高3.5cm。底部はヘラ切りの上に板状圧痕がつく。161は四耳壺になると考えられる陶器。残存部には濃緑-黒緑色の釉をかけるが、ほとんど剥落している。胎土は比較的密で灰色をなす。また黒色粒を若干混入する。復元口径8.8cm。



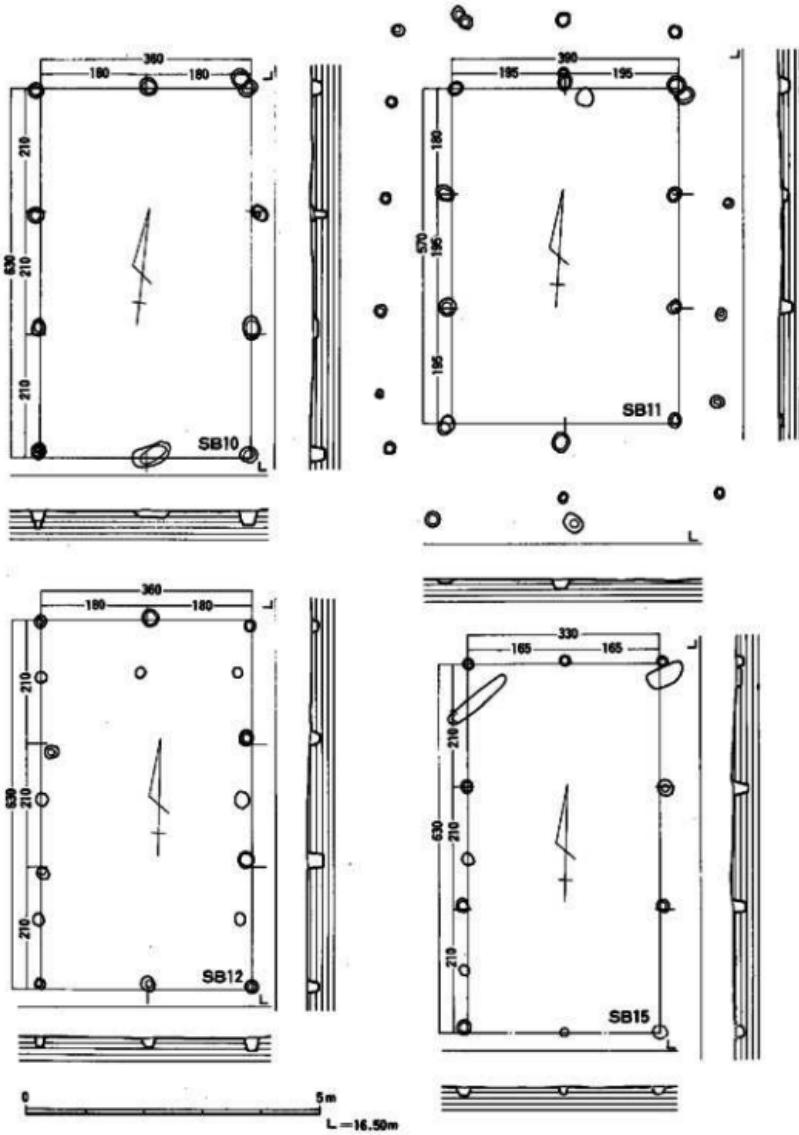
第10圖 SB01・02・03・04・05實測圖 (1/100)



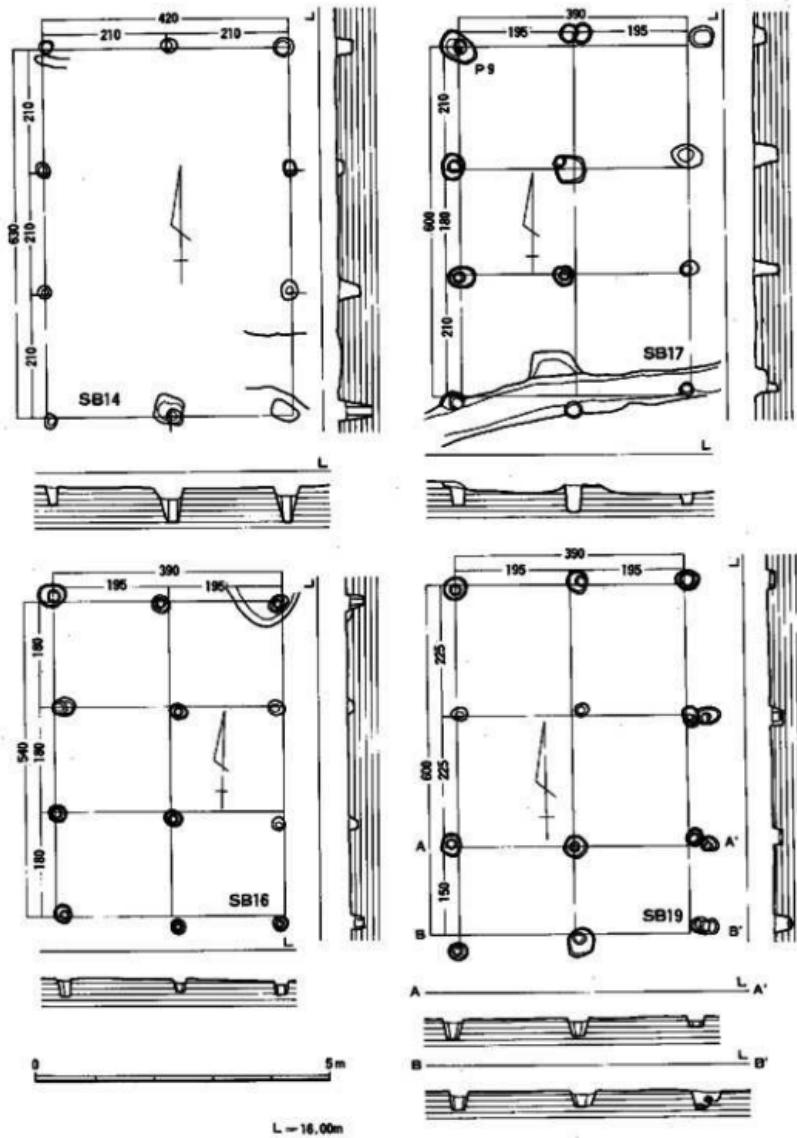
第11圖 SB06・08・09實測圖 (1/100)



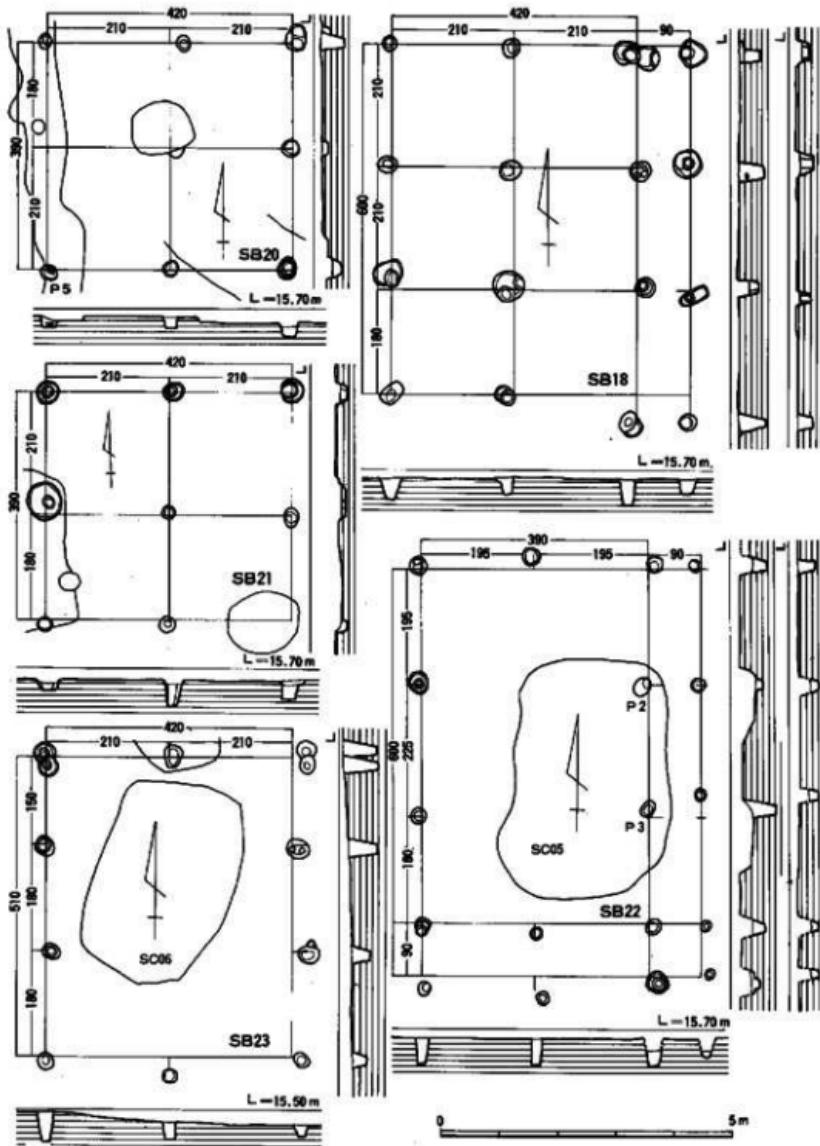
第12回 SB07・13実測図(1/100)



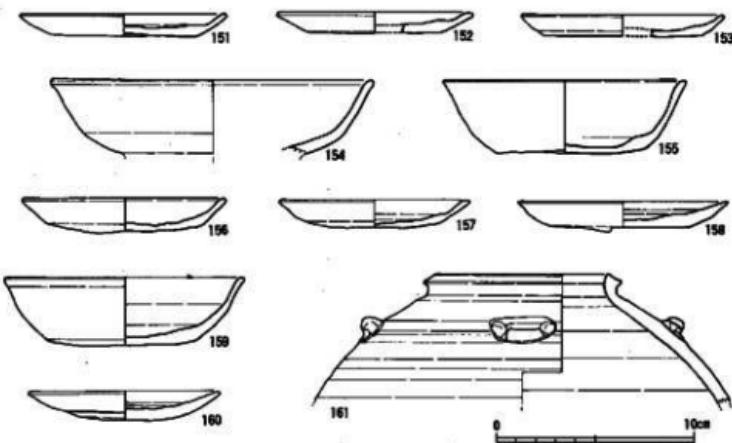
第13図 SB10・11・12・15実測図(1/100)



第14図 SB14・16・17・19実測図(1/100)



第15図 SB18・20・21・22・23実測図(1/100)



第16図 標立柱遺物・ピット出土遺物(1/3)

2) 井戸

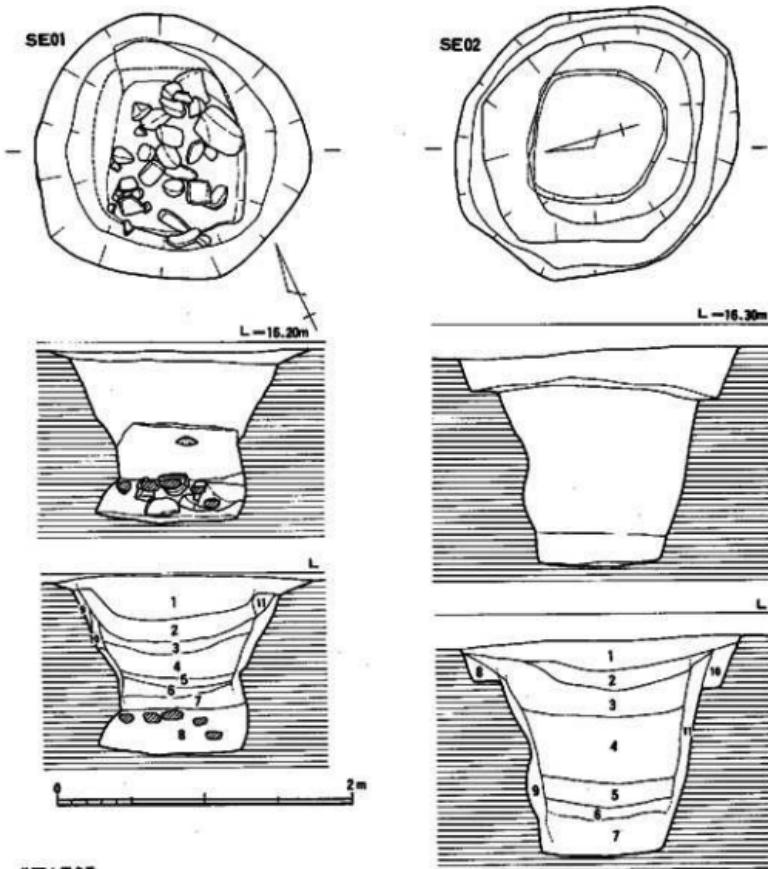
a区3基 (S E13~15)、b区5基 (S E08~12)、c区7基 (S E01~07) の15基を検出した。井戸の上部、または底部に石を配したものはあったが、木質の井戸側の検出はなかった。

S E01 (第17図) 上面は径180~190cmの不整円形。深さ70cm付近で壁が直立気味になり、深さ120cmの底面は100×85cmの長方形となる。底面西側には湧水による抉れが認められる。深さ90cmから底面にかけては大小の花崗岩の礫があり、その多くが焼けて赤変している。壁に沿って黒色粘土が見られ、中央は底面と同じ長方形となる。あるいは長方形に組んだ木質の井戸側を抜いた痕であろうか。

出土遺物 (第18図162) 高麗青磁碗。見込みに浅い段を作り、その下に輪状の砂目跡がある。また疊付にも砂目跡が認められる (図版11参照)。釉は光沢のない灰緑色で、疊付から高台内側は搔き取る。胎土は青味をおびた灰色だが、底部中央付近の肥厚した部分は黄灰色となり、しまりもない。他に土師器皿・碗、黑色土器A・B類、白磁碗V類、越州窯系青磁などの小一細片がある。

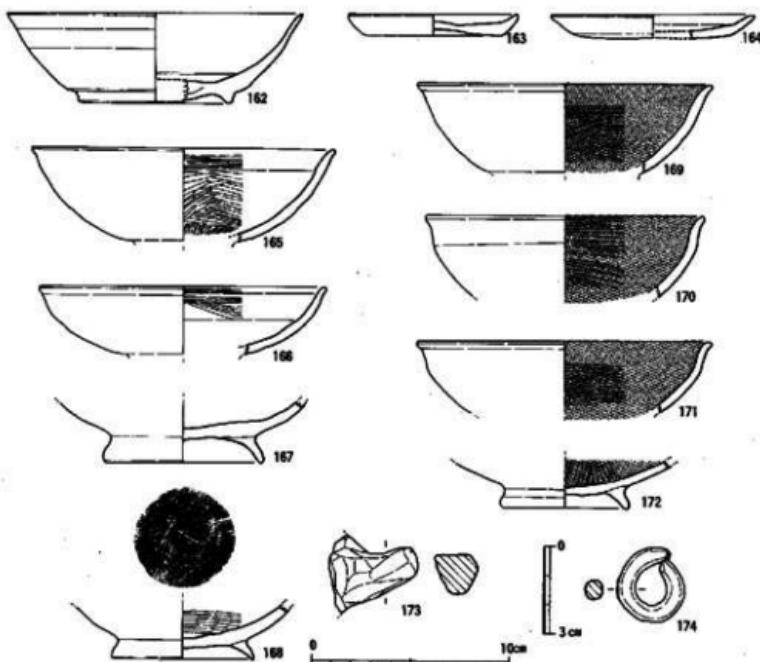
S E02 (第17図) 205×182cmの梢円形平面をなす。深さ30cmでテラスを作り、そこから一辺85cm前後の方形の底面に下る。上面からの深さ153cm。覆土のあり方はS E01に相似し、壁に沿った黒色粘土は平面環状となる。

出土遺物 (第18図163~174) 163、164は土師器皿。復元口径8.5~10.2cm、器高1.1~1.2cm。底部はヘラ切り。165~168は土師器碗。復元口径14.4~15.2cm。167を除き内面はヘラ磨きで仕上げる。168の内底には「大」の字風のヘラ記号が認められる。169~172は黑色土器B類碗。



井戸土層名表					
SE01		6 黒色粘質土	S E07	2 噴褐色砂質土	
1 黄褐色砂質土	7 灰褐色土	1 黄褐色土	3 棕色土	3 棕色土	
2 黑褐色砂質土	8 棕褐色土	2 噴褐色砂質土	4 淡褐色砂質土	4 淡褐色砂質土	
3 黑褐色粘質土	9 灰黑色粘質土 (炭化物混り)	3 灰褐色砂質土	5 灰黑色土	5 灰黑色土	
4 黄褐色粘質土	10 棕褐色土	4 噴灰褐色土 (やや砂質)	6 噴灰褐色土に暗褐色砂混る	6 噴灰褐色土に暗褐色砂混る	
5 黄褐色粘質土	11 棕褐色粘質土 (炭化物混り)	5 暗褐色粘質土	7 くすんだ黄褐色土	7 くすんだ黄褐色土	
6 灰褐色粘質土		6 淡褐色砂質土	8 黄白色砂	8 黄白色砂	
7 黑色粘質土 (炭化物混り)	S E04	7 灰色粘土	9 暗黃白色砂	9 暗黃白色砂	
8 灰色粘土	1 黄褐色粗砂質		10 暗黃白色砂	10 暗黃白色砂	
9 棕褐色土	2 黑色粘質土 (炭化物混り)	S E09			
10 黄褐色土 (炭化物混り)	3 灰褐色粘質土	1 明黄褐色砂質土	1 黄褐色土		
11 棕褐色土		2 黑色土 (炭混り)	2 噴褐色粘質土		
S E02		3 噴褐色砂質土	3 噴褐色砂質土	3 噴褐色砂質土	
1 黄褐色砂質土	2 噴灰褐色粘質土 (砂混り)	4 灰褐色土 (下部に暗褐色粘質混る)	4 黑褐色粘質土	4 黑褐色粘質土	
2 黄褐色砂質土	3 灰黑色粘質土	5 灰黑色砂混り粘土	5 黑褐色砂混り粘土	5 黑褐色砂混り粘土	
3 噴灰褐色土 (砂混り)	4 噴灰褐色砂質土	6 灰黑色砂混り粘土	6 黑褐色砂混り粘土	6 黑褐色砂混り粘土	
4 噴灰褐色土		S E11	7 噴灰褐色砂質土	7 噴灰褐色砂質土	
5 灰褐色砂質土		1 明黄褐色砂質土	8 噴灰褐色砂質土	8 噴灰褐色砂質土	

第17圖 SE01・02実測図(1/40)



第18図 SE01・02出土遺物(1/2, 1/3)

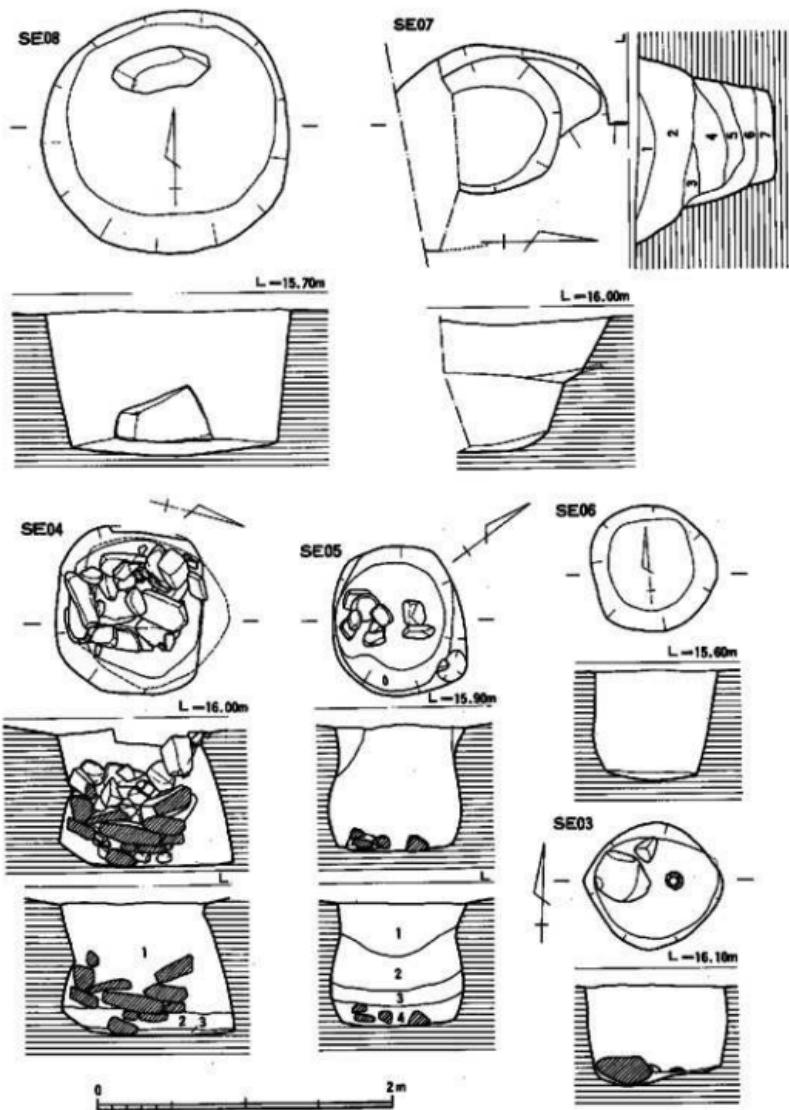
復元口径14.0~14.8cm。内面はヘラ磨きを行い、黒くいぶす。外面は横ナデ。いずれも磨滅している。173は土師器壺の把手。174は径6mmの鉄条を環状に仕上げたものである。この他、黒色土器B類、須恵器、須恵質土器、青磁、白磁の細片がある。

S E 03 (第19図) 上面は一辺80cm前後の隅丸方形。深さ60cm。底面には花崗岩の大小砾が2つある。覆土はS E 01・02同様の縦に沿った黒色粘土が認められた。

出土遺物 (第20図175) 黒色土器B類挽1点のみが底面より出土した。内外面ともヘラ磨きを行う。内底と外面体部下間に「大」の字風のヘラ記号が認められる。

S E 04 (第19図) 上面は東西に長軸をとる115×100cmの長方形形状を呈する。深さ95cm。底面近くは湧水による抉れがある。井戸廃棄の際、多量の焼けた大小花崗岩を投入しており、その平面からすれば方形の井戸側を想定できる。

出土遺物 (第20図176~183) 176~180は土師器。176は復元口径9.4cm、器高1.3cmの皿。底部はヘラ切りで板状压痕が残る。177~180は椀。177と179の内面はヘラ磨き。180は体部内



第19図 SE03・04・05・06・07・08実測図 (1/40)

外面とも丁寧にヘラ磨きし、焼成もきわめて良く、淡赤褐色を呈する。他の土師器とは異なる。178の口径15.1cm、器高5.5cm。181は青磁碗。薄手で、口縁部は外反する。口縁部内側と体部外面中位に稜をもつ。灰緑色の光沢のある釉で、表面には氷裂がみられる。胎土は明灰色で密。越州窯系か。182は須恵質の大甕の底部。口縁部は反転して横に開き、肩部は16条ほどの沈線をめぐらすことが、残存する小片からわかる。体部下半は横ナデによる凹凸が内外面とも著しい。外面は漆黒色で光沢をおび、内面は灰黒色。胎土は青灰色でしまりがない。投棄された石の上面から出土したもので、他にS C01、S D13b、S D30、S D37などからもその破片が出土している。朝鮮産のものか。183は平瓦。外面格子目、内面布目。この他黒色土器A・B類椀、輪花口縁の白磁片、骨片などがある。

S E 05 (第19図) 上面は南北に長軸をとる103×87cmの楕円形。東南隅はピットに切られる。深さ20cm前後で壁が底に向かって広がる。底面は径75cmのほぼ円形で疊が7個ある。上面からの深さ86cm。土師器皿・椀、黒色土器A・B類椀など細片少量が出土したにとどまる。

S E 06 (第19図) 径85cm前後の不整円形の上面を呈する。深さ75cmで方形状の底面に至る。出土遺物 (第20図184・185) ともに土師器杯。復元口径12.5~12.8cm、器高3.0~3.1cm。底部はヘラ切りで、185には板状圧痕が残る。体部の調整はともに横ナデ。

S E 07 (第19図) 南側が調査区外に延び、東側は試掘トレンチにかかる。深さ90cm前後。北側の深さ40cm付近にテラスを設ける。一部壁に沿った灰黒色粘質土が認められる。土師器皿、黒色土器A・B類椀などの小・細片が少量出土しただけである。

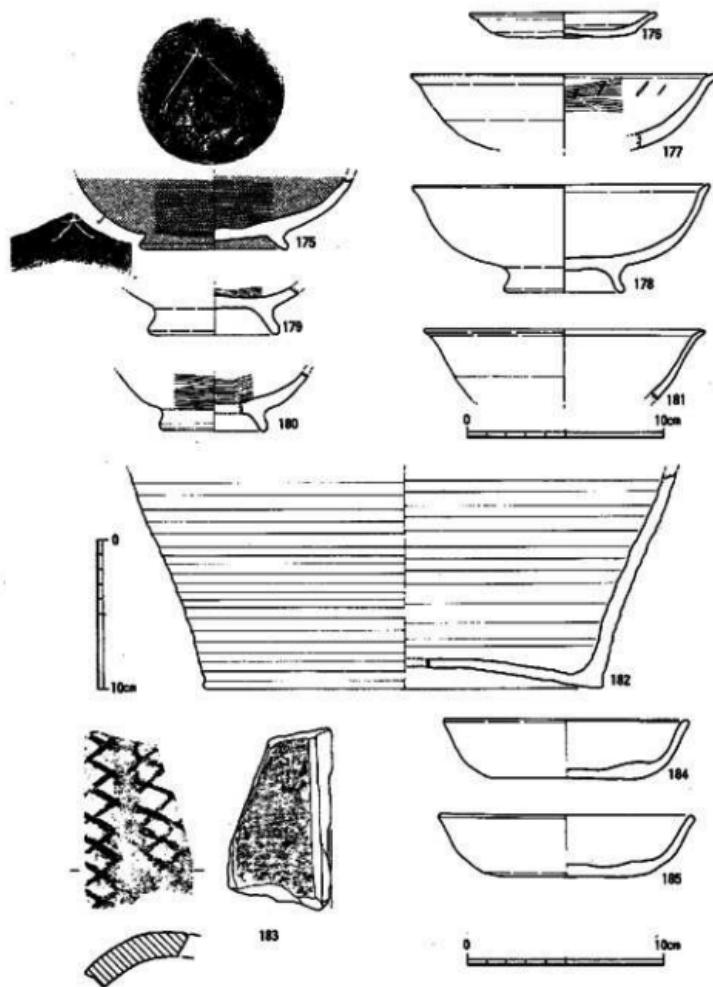
S E 08 (第19図) 上面は径170cm前後の大型円形。深さ100cm。円形の底面北側には長さ77cm、厚さ37cmの岩石がある。土師器皿・椀、黒色土器A・B類椀などの細片少量が出土した。

S E 09 (第21図) 上面は128×113cmの不整円形。断面は漏斗状で、深さ17cm付近から、横が直立はじめると深さ35cmまで、長さ10cm前後の疊を用いて壁に貼石を行う。底面は径45cm前後の円形。上面からの深さ80cm。

出土遺物 (第22図186) 復元口径8.6cm、器高1.8cmの土師器皿。底部はヘラ切り。内底には煤が付着する。他に土師器椀、黒色土器A・B類椀の細片が少量ある。

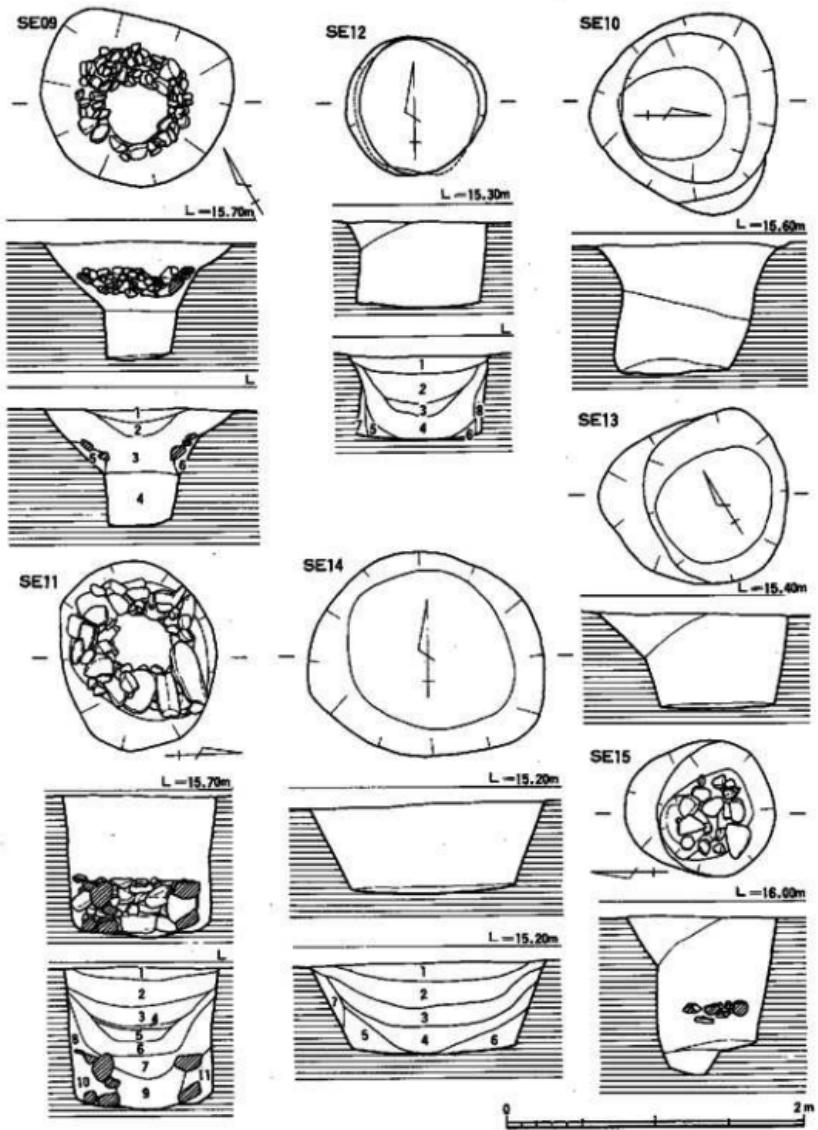
S E 10 (第21図) 上面は132×126cmの不整円形。中ほどにゆるい段がつき、深さ89cmで楕円形の底面となる。S D41を切る。

出土遺物 (第22図187~194) 187は土師器杯。口径13.2cm、器高3.3cm。底部はヘラ切りで、板状圧痕が残る。188~191は土師器椀。185は復元口径15.0cm、器高6.0cm。底部はヘラ切りで、板状圧痕が認められる。191は磨滅しているが、体部内外面ともヘラ磨きのようである。192は瓦器椀。体部内面と外面上半はヘラ磨き、外下面はヘラ削り。内面にはヘラ状當て具痕がみられる。外面の一部は光沢をおびる。193は長さ10.2cm、径3.5cmの土錐。194は平瓦。外面格子目、内面布目。この他黒色土器A・B類椀、須恵質土器などの細片がある。

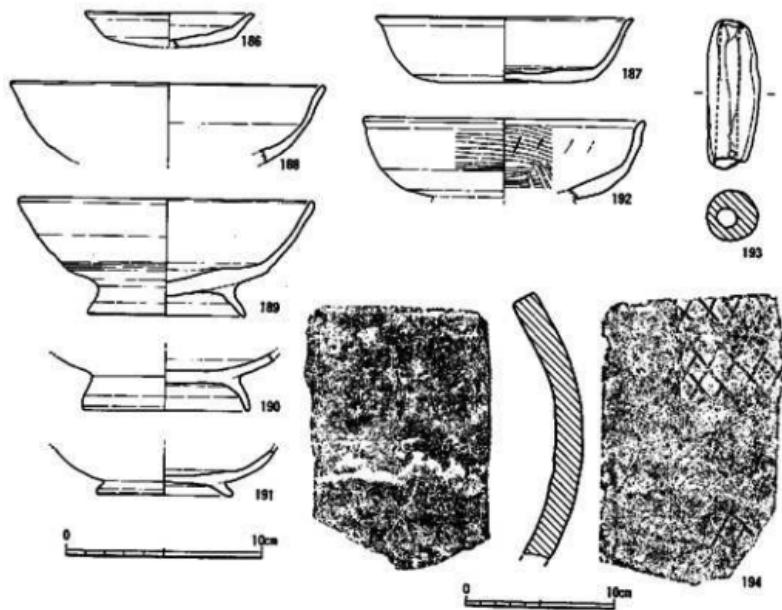


第20図 SE03・04・05・06出土遺物(1/3, 1/4)

S E 11 (第21図) 上面は東西に長軸をとる135×105cmの楕円形。壁はほぼ垂直。深さ98cm。底面から高さ40cm位まで3~4段に石を組み井戸側としている。石組の礫は1点が堆積岩、他はすべて花崗岩を用い、一部焼けたものも認められる。土師器皿・椀、黒色土器A・B類椀な



第21図 SE09・10・11・12・13・14・15実測図(1/40)



第22図 SE09・10出土遺物(1/3、1/4)

どの細片が少量出土している。

S E 12 (第21図) 上面は径95cm前後の円形。壁はほぼ垂直になる。底面は円形。深さ58cm。土師器皿・椀、黒色土器A・B類椀、須恵器などの細片が少量出土した。

S E 13 (第21図) 上面は130×120cmの不整円形。西北側壁に段がつく。深さ65cm。底面は梢円形。土師器皿、黒色土器B類椀などの小~細片が少量出土したとどまる。

S E 14 (第22図) 上面は東西に長軸をとる160×140cmの梢円形。壁はゆるやかに下り、深さ63cmで不整円形の底面に達する。土師器椀、黒色土器A類椀の小片の他土師器細片が少量出土した。

S E 15 (第21図) 上面は南北に長軸をもつ102×93cmの梢円形。北側壁には段がつく。深さ90cmで平坦面を作り、そこから北側部分に径40cm、深さ20cmの円形坑を掘り下げる。井戸内には大小砾がみられるが、底面よりかなり浮いており、井戸廃棄の際投入されたものであろう。土師器杯・椀、黒色土器A・B類椀などの小~細片が少量出土している。

3) 土坑

a区3基 (SK01・03・04)、b区34基 (SC02~07、SK30~57)、c区27基 (SC01、S

K 04~29) の合計64基を検出した。このうちS Cで番号を付けた土坑は、方形もしくは長方形をなし、規模もS Kで番号を付けたものに比べ大きいことから、当初竪穴住居とも考えた。しかし明確な柱穴もなく、またS C 03、04のように掘立柱建物の中に営なまれた可能性もでてきたため、ここでは土坑として扱っておく。しかし先にあげた特徴に加え、覆土に広範囲な炭化物層が認められることから、S Kとした土坑とは性格の相違を指摘できる。ここではまずこのS Cについて触れ、その後S Kについてみてゆく。土坑の規模は特に注記しない限り長さ×幅×深さ(cm)で示した。なおS K 02は欠番である。

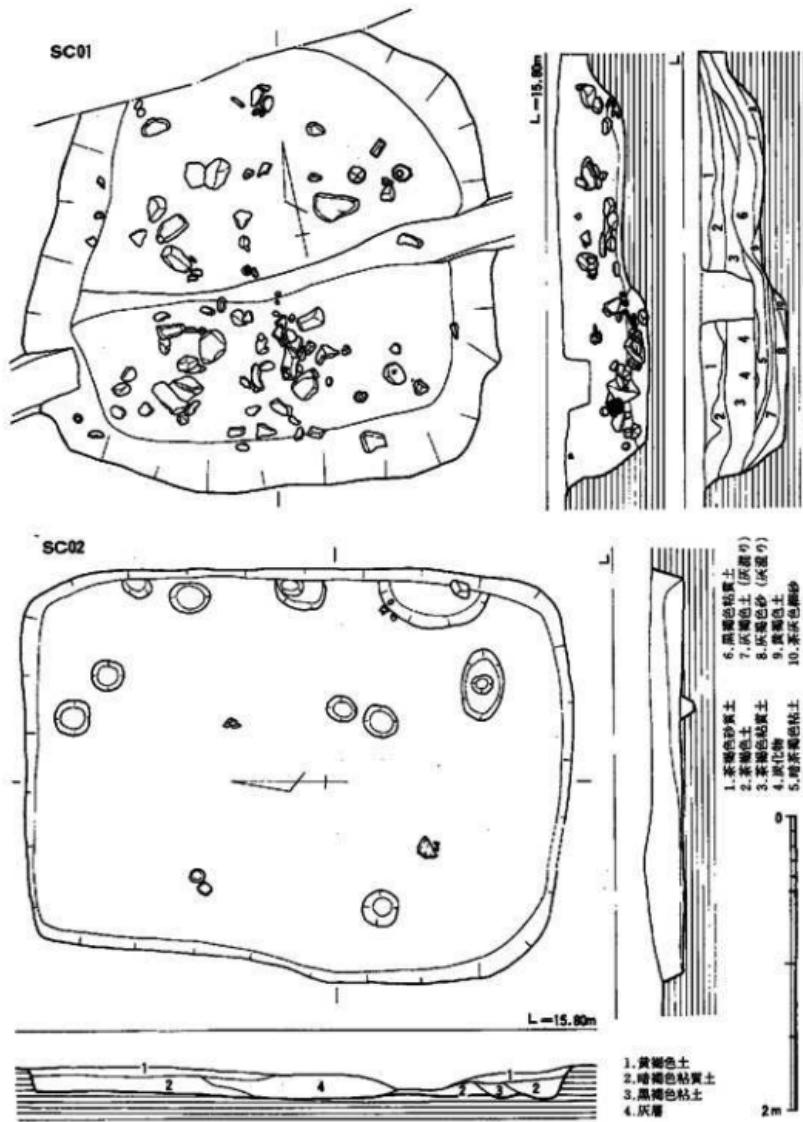
S C 01 (第23図) 西北隅が調査区外にかかるが、一辺320cm前後の方形土坑としてよいであろう。底面は中央で段がつき、北側が高く深さ48cm、南側が深さ60cmとなる。底面から5~10cm高い所に、厚さ4~15cmの炭化物層があり、ほぼ底面全域に広がる。この炭化物層から底面にかけては大小礫が散らばり、間に土師器片なども点在する。

出土遺物 (第25図195~205) 195~201は土師器。うち195~198は皿で、197の口径が10.8cm、他は9.4~9.8cm。器高は0.9~1.5cm。いずれの底部もヘラ切りで、195、196には板状压痕が認められる。199~201は椀。200、201の高台は大きく開く。199は前2点に比べ体部が浅く、内面には一部ヘラ磨きが認められる。202は黒色土器B類の椀。内外ともよく研磨される。高台は低く、その断面は三角形に近い。203は輪状高台をもつ磁器椀。焼けたものの軸は黄白色ににごるが、疊付きを除き施されている。胎土は青で明灰色、高台部分は赤褐色となる。見込みには沈線がめぐる。越州窯系青磁であろうか。204は高麗青磁碗。器壁は薄く、体部はほぼ直線的に外傾する。光沢の少ない灰緑色の軸で、淡灰色の胎土には黒色粒、白色粒がごく少量混る。205は滑石製紡錘車の半欠品。径8.8cm、厚さ1.2cm。この他土師器甕、黒色土器A類椀、須恵器、白磁、陶器などの小~細片多数と砥石2点(第9図138~140)がある。

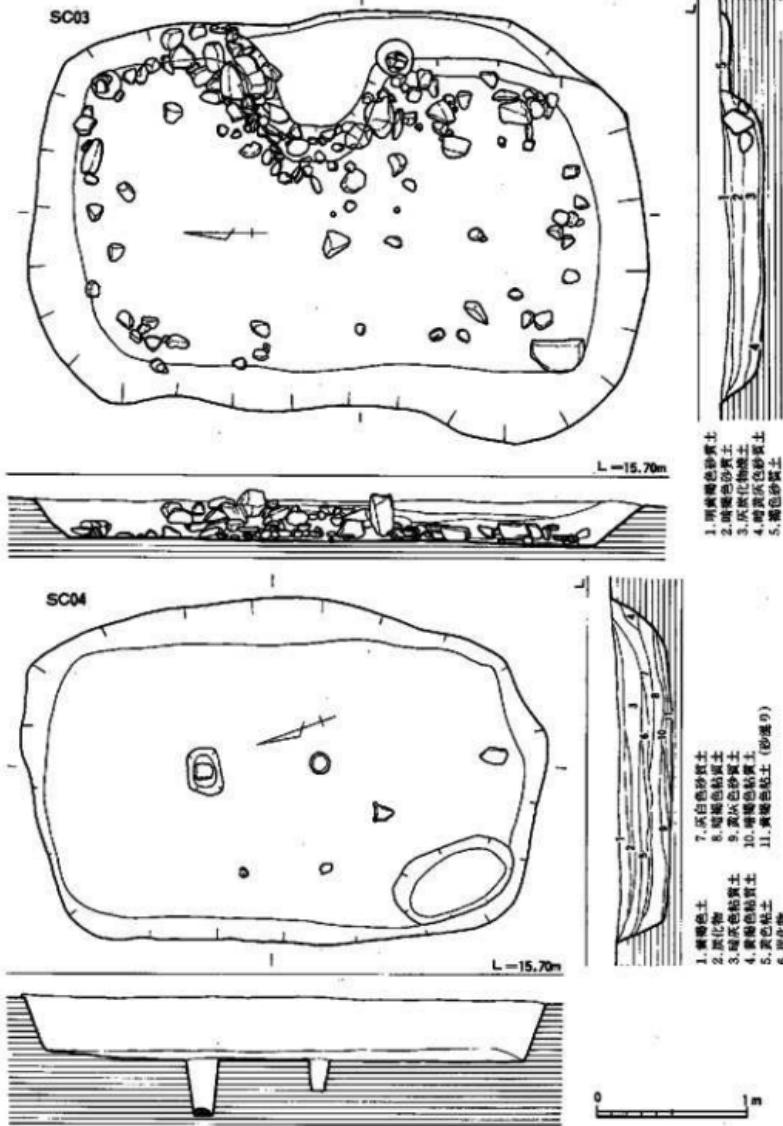
S C 02 (第23図) 370×283×30cmの南北に長軸をとる長方形土坑。坑内のピットはこの遺構に伴うものではない。覆土には灰層が認められる。S K 41、S K 42、S D 37を切る。

出土遺物 (第25図206~208) 206は土師器皿。復元口径10.5cm、器高1.4cm。底部はヘラ切りで、板状压痕が残る。207は黒色土器B類椀。体部は内外面ともヘラ磨き。復元口径15.8cm、器高6.2cm。208は土師器甕。「く」の字状に外反する口縁下に2条の沈線をめぐらす。復元口径18.7cm。この他土師器椀、黒色土器A類椀、瓦器椀、須恵器の小~細片が少なからずある。

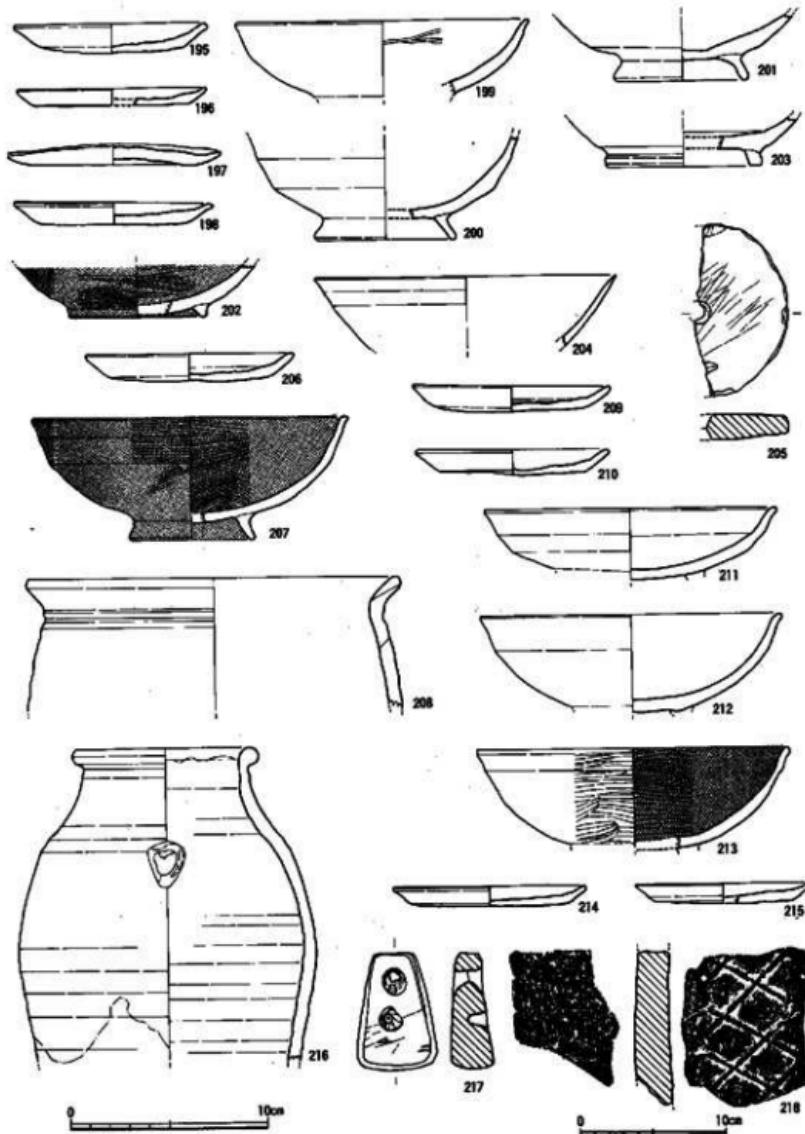
S C 03 (第24図) 南北に長軸をとる長さ420cm、幅270cmの隅丸長方形土坑、東側壁の深さ6cmの所にテラスを作り、その中央部分が舌状に内側へ張り出す。底面までの深さ30cm。底面には壁に沿って大小礫がみられ、特に舌状の張り出し部分はそれが著しい。また底面上すべてを覆う焼土・炭化物・灰の堆積がある。東北隅および東側中央のピットはこの遺構に伴うもので、とすればこのピットを掘立柱建物の柱穴の一部とするS B 22は、この土坑の覆屋の可能性が高い。S K 48、S D 29を切る。



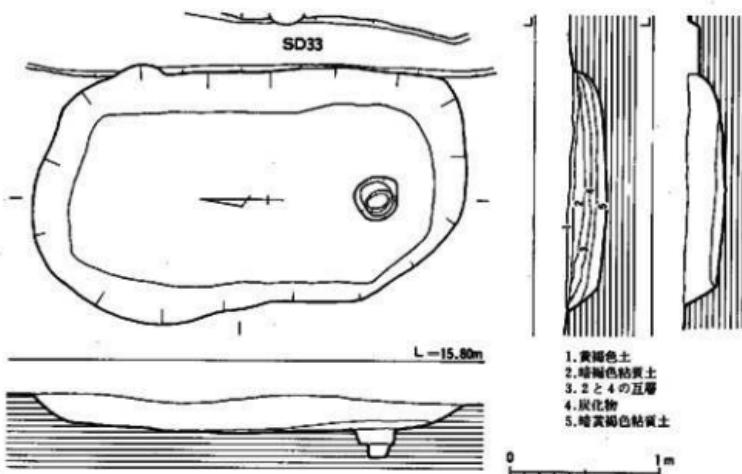
第23図 SC01・02実測図(1/40)



第24図 SC03・04実測図(1/40)



第25図 SC01・02・03・04出土遺物(1/3, 1/4)



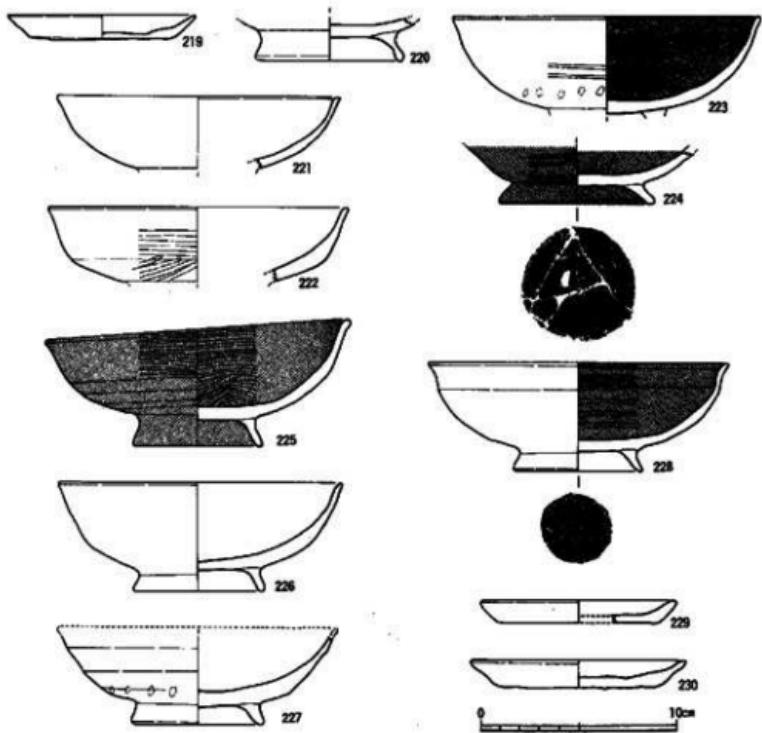
第26図 SC07実測図 (1/40)

出土遺物（第25図209～213） 209、210は土師器皿。口径9.7～10.1cm、器高1.3cm。底部とともにヘラ切りで、210には板状圧痕が残る。211、212は土師器柵。復元口径14.7～15.3cm。ともに体部は横ナデ調整。213は黒色土器A類柤。内面のみならず外面もヘラ磨きを行う。復元口径15.8cm。この他黒色土器B類柤、瓦器柤、須恵質土器、白磁、褐釉陶器などの小～細片多数と鉄滓がある。また2層から糸切り底の土師器皿が2細片出土している。

S C04（第24図） 357×235×43cmのほぼ南北に長軸をとる長方形土坑。この長軸から約20度西にふれたほぼ磁北方向でS B23がS C04を覆うように建てられている。方位、建物内での位置など問題は残るが、S B23がS C04の複屋である可能性も一応挙げておく。坑内には灰・炭化物層が認められる。S C05、S C06、S D38を切っている。

出土遺物（第25図214～218） 214、215は土師器皿。復元口径9.0～9.8cm、器高1.0cm。底部はヘラ切りで214には板状圧痕が残る。216は陶器壺。外面には黄緑～青灰色の釉、内面は黄白色の釉が施されているが、外面を中心にして剥落著しい。胎土は暗褐色で白色粒が比較的多く混じる。肩部には耳の取り付け痕が残る。217は長さ5.9cm、下端幅4.1cm、厚さ1.8cmの滑石製品。上部の孔は両面穿孔で貫通するが、その下の孔は途中で止まる。218は布目瓦片。表面は格目タタキ。この他土師器柵、黒色土器A・B類柤、瓦器柵、青磁、白磁などの小～細片が多量にあり、また鉄滓も出土している。

S C05 S C04に北側を、S K35、S K36に南側を、またS D21に東側を切られて全容はうかがえない。南北長5.5m、東西幅3.5m前後の南北に長い形態をなすものか。深さ25cm。西半



第27図 SC05・06・07出土遺物 (1/3)

部を中心に炭化物層が認められる。

出土遺物（第27図219～225） 219は土師器皿。復元口径9.4cm、器高1.2cm。底部はヘラ切りで板状圧痕が残る。220～222は土師器椀。復元口径14.4～15.2cm。222の外面はヘラ磨き。223～225は黒色土器椀。223はA類。外面にもヘラ磨きを行い、下半には指押え痕が残る。224・225はB類。体部内外面ともヘラ磨きを施すが、225の下半はヘラ削りとなる。224の底部にはヘラ記号がある。225の口径15.4cm、器高6.4cm。この他青磁、白磁などの細片少量と鉄滓、フイゴの羽口片などがある。

S C 06 遺構の大半を東側のS C 05に切られ全容は不明。南北幅4.5m前後の長方形状の土坑か。深さ15cm。覆土には炭化物層がある。

出土遺物（第27図226～228） 226、227は土師器椀。ともに磨滅著しいが、残存部は横ナデ。227の体部外面下半には指押え痕が残る。226の復元口径14.4cm、器高5.5cm。228は黒色土器A

類椀。外面の調整は磨滅して不明。底部には「×」のヘラ記号がある。復元口径15.5cm、器高5.5cm。この他土師器皿、黒色土器B類椀などの細片が少量ある。

S C07 (第26図) 南北に長軸をとる295×170×25cmの長方形土坑。底面から7cmほど上に厚さ5cm前後の炭化物層が全面に広がる。東側でS D33を切る。

出土遺物 (第27図229・230) ともに土師器皿。復元口径9.8~10.8cm、器高1.2~1.4cm。底部はヘラ切りで、230には板状圧痕が残る。この他土師器椀・甕、黒色土器A・B類椀、須恵質土器、青磁椀などの小~細片が少なからずある。

S K01 230×92×11cmの楕円形土坑。出土遺物はない。

S K03 75×53×5cmの長方形土坑。底面は凹凸が著しい。土師器細片4のみが出土。

S K04 S B01の北側にある100×54×10cmの長方形土坑。出土遺物はない。

S K05 (第28図) 390×170×25cmの東西に長軸をとる隅丸長方形土坑。坑内南半には焼土と灰層が広がる。

出土遺物 (第31図231~234) 図示したのはいずれも土師器破片。231は皿で復元口径9.8cm、器高1.0cm。底部はヘラ切り。232~234は椀。復元口径15.2~15.4cm。232の内面はヘラ磨きを行う。他に黒色土器A・B類、須恵器などがある。

S K06 (第28図) 長軸を東西にとる110×73×14cmの楕円形土坑で、南壁には段がつく。坑内土層は炭化物を多量に含んだ黄褐色土がほぼ全体を占め、その下に厚さ10cmの灰黑色粘質土がある。

出土遺物 (第31図235~237) いずれも黒色土器椀。235はA類で、体部に屈曲を作り、口縁がわずかに外反する。236、237はB類。236は磨滅して研磨が不明瞭。口径15.8cm、器高6cm。237は高台が低く、体部の立ち上がりが急で小さい。他に土師器皿・椀・甕の細片がある。

S K07 (第28図) 径80cm前後の不整円形土坑。深さ35cmほどで一端平坦面を作り、そこから10cmほど下って底となる。土師器皿・椀・甕、黒色土器A・B類、瓦器椀などの細片が出土した。

S K08 (第28図) 東西に長い不整形土坑。西側は調査区外となる。南北幅75cm前後、深さ12cm。坑内は焼土塊を混えた黒褐色砂質土一層。

出土遺物 (第31図238) 土師器椀片。復元口径13.4cm。内外面とも磨滅する。他に土師器皿、黒色土器A・B類などが出土している。

S K09 S D15溝底で検出したもので、その溝に切られる。径110~120cm、深さ15cmの不整円形。覆土は暗褐色砂質土一層。

出土遺物 (第31図239・240) ともに土師器。239は復元口径10.2cm、器高1.1cmの皿。底部はヘラ切り。240は復元口径14.6cmの椀。内外面とも磨滅し、調整不明瞭。

S K10 南北に長軸をもつ117×75cmの楕円形。深さ3cmと浅く、出土遺物もない。

S K11 116×90×12cmの南北に長軸をとる楕円形土坑。覆土は黄褐色土一層。

出土遺物（第31図241） 復元口径15.4cmの土師器碗片。内面はヘラ磨き。他に土師器皿、須恵器細片が少量ある。

S K12 東西に長軸をとる95×78×16cmの楕円形土坑。西南側の深さ約10cmの所にテラスを作っている。

S K13（第28図） 径80cm前後、深さ12cmの不整円形土坑。覆土には焼土、炭化物が認められる。土師器皿・碗などの細片5点のみが出土。

S K14 長軸を東北—西南にとる109×89×17cmの楕円形土坑。土師器皿・碗などの細片のみが出土した。

S K15（第28図） 径120cm前後の円形土坑。深さ26cm。北側が調査区外にかかる。

出土遺物（第31図242） 復元口径13.4cmの黒色土器B類碗。内外面ともヘラ磨き。他に土師器皿・碗・壺、黒色土器A類碗、越州窯系青磁碗の細片および土鍾が出土した。

S K16（第28図） 径80cm前後、深さ14cmの円形土坑。西側はピットに切られる。土層堆積は後述するS K17と同じ。縄文土器4片が出土したが、覆土からすると他土坑と同時期。

S K17（第28図） 径85~93cmの東西にやや広い円形土坑。深さ20cm。坑内には挙大の礫が8点点在する。

出土遺物（第31図243） 復元口径15.2cmの瓦器碗片。内外面ともヘラ磨きし、一部光沢をもつ。他に土師器皿・碗・壺、黒色土器B類碗、須恵器、外面に陽刻鏡達弁文をもつ白磁などの細片が出土した。

S K18（第29図） 径125cm前後の不整円形土坑。深さ35cm。黒色土器碗B、土師器皿・碗・壺、須恵器壺などの細片20点ほどが出土した。

S K19（第29図） S E 01に東側を切られる。東西幅130cmで、もともとは東西に長軸をとる楕円形を呈するものか。深さ42cmで、底面は土面よりわずかに広がる。

出土遺物（第31図244） 復元口径15.0cmの黒色土器A類碗。内面はヘラ磨き、外面は横ナデ調整。他に土師器皿・碗・壺、黒色土器B類、須恵器などの細片が出土。

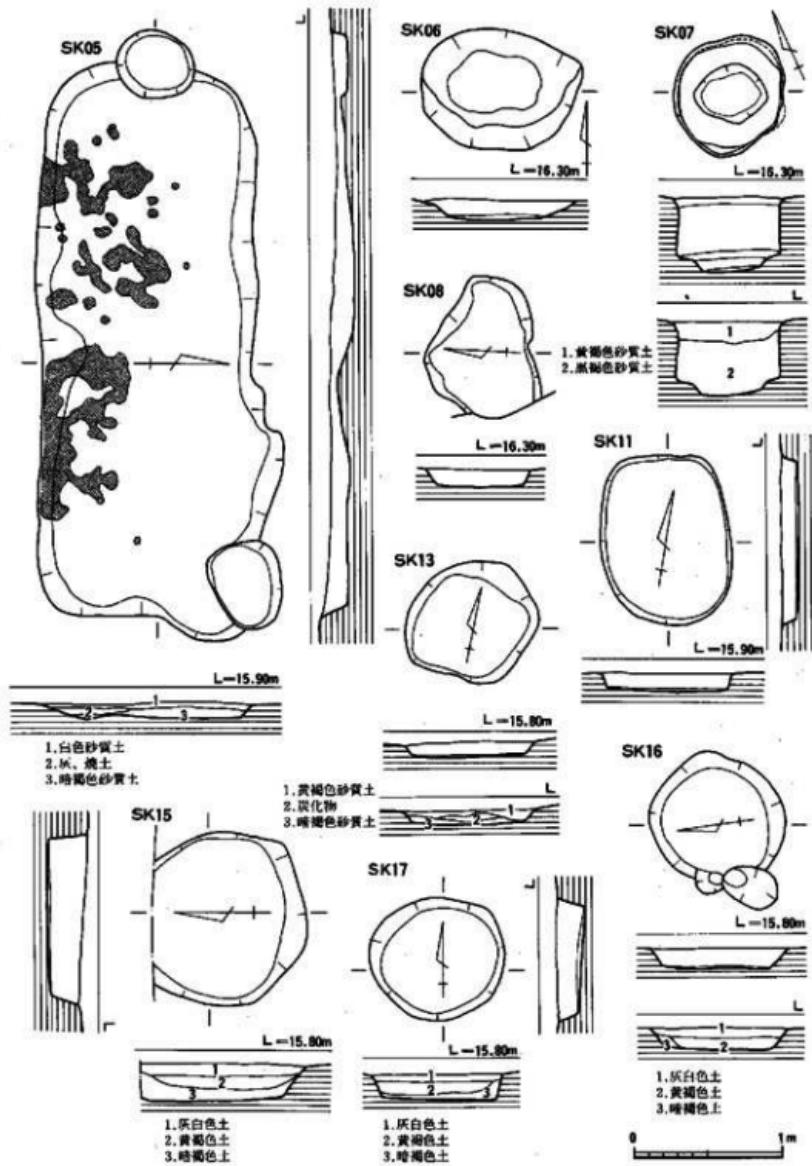
S K20 東北—西南に長軸をもつ113×72×15cmの楕円形土坑。S K09同様S D 15溝底で検出したもので、この溝より古い。土師器皿・碗など十数片が出土。

S K21（第29図） 南北に長軸をとる110×85×20cmの楕円形土坑。出土遺物はない。

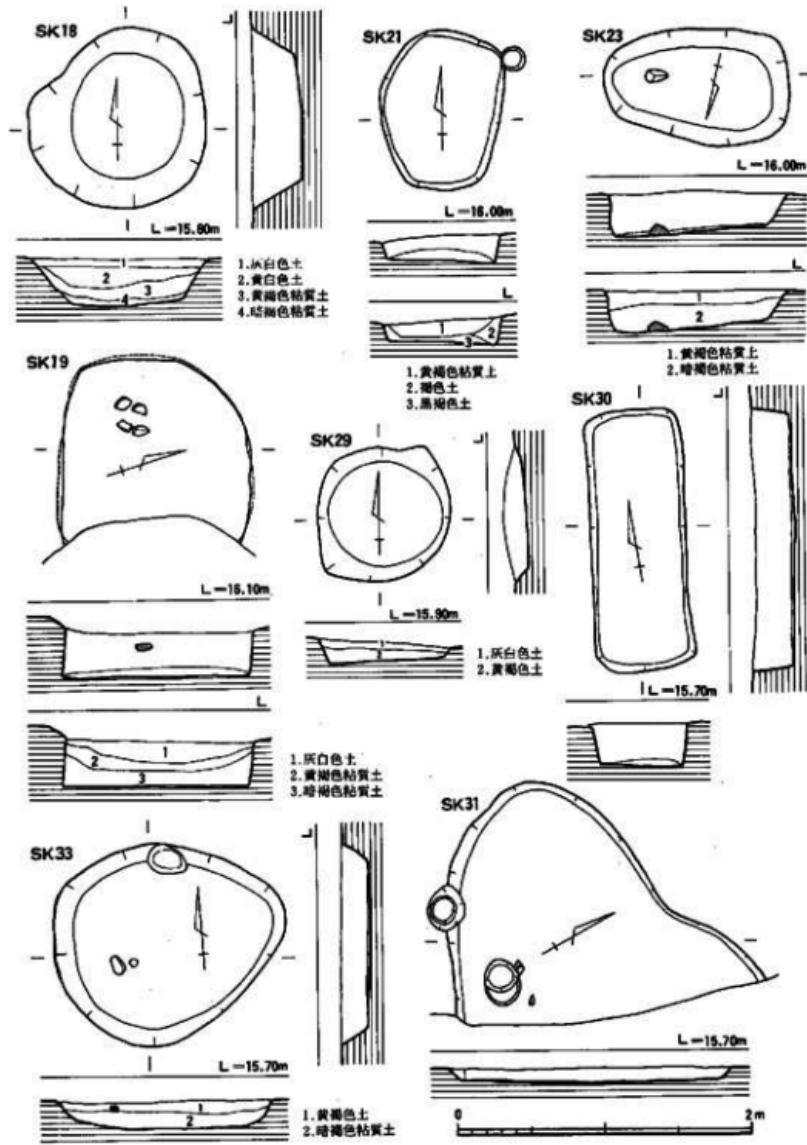
S K22 径80cm前後、深さ13cmの円形土坑。北側でピットを切る。土師器碗などの細片のみが出土。

S K23（第29図） 東西に長軸をもつ楕円形土坑。127×80×30cm。底面は東側に傾く。

出土遺物（第31図245・246） ともに黒色土器B類碗。245の体部は内湾気味に開き、口縁内側には沈線をめぐらす。246は体部で屈曲し、口縁が外反する。復元口径15.8~16.2cm。他



第26圖 SK05・06・07・08・13・15・16・17測測圖(1/40)



第29图 SK18·19·21·23·29·30·31·33实测图(1/40)

に土師器皿・椀、黒色土器A類、須恵器などの細片がある。

S K24 188×71×10cmの南北に長い土坑。北側は先細りになる。土師器甕など少量出土。

S K25 径80cm、深さ5cmの円形土坑。覆土は黄褐色土。土師器皿・甕の細片1づつが出土。

S K26 86×77×7cmの南北にやや長い方形土坑。覆土は暗褐色粘質土一層。土師器甕細片などが出土。S K27を切る。

S K27 132×95×5cmの東西に主軸をとる梢円形土坑。東北隅をピット、東南隅をS K26に切られる。覆土は暗褐色粘質土。土師器皿・椀、黒色土器A類椀などが少量出土。

S K28 54×37×5cmをはかる長方形の小型土坑。黒色土器B類椀1個体分他が出土。

S K29 (第29図) 少少の出入りがあるものの径90cmの円形土坑。深さ18cm。土師器片などが少量出土。

S K30 (第29図) 南北に長軸をとる179×66×30cmの長方形土坑。S D08を切る。形態からすれば土壤基か。土師器細片が少量出土。

S K31 (第29図) 最大南北幅200cm、深さ10cmの不整形土坑東側をS D33に切られ、全容不明。ただ溝の東側までのびないことから、東西幅220cm前後でおさまる。S K32を切る。黒色土器椀A、土師皿など細片少量が出土。

S K32 東南側をS K31に、東側をS D33に切られる。南北幅約100cm、深さ12cmの不整形土坑。黒色土器椀B、土師器皿・椀など6細片が出土。

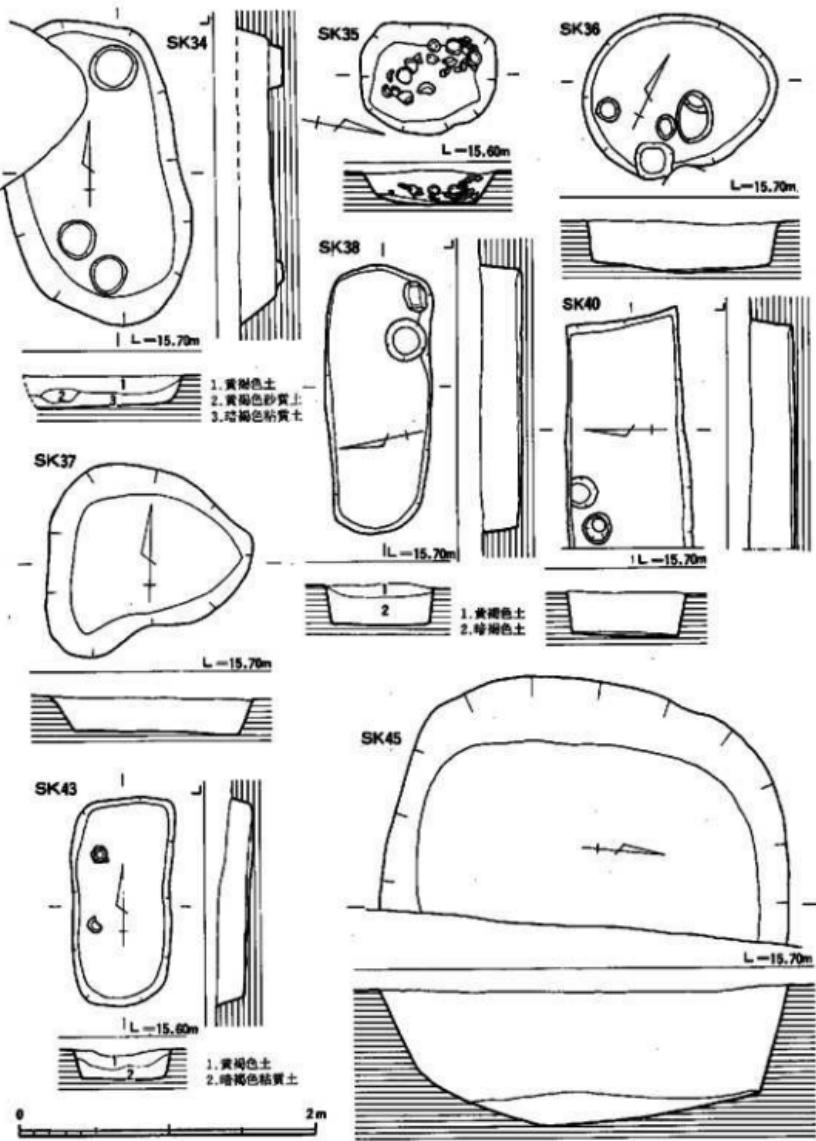
S K33 (第29図) 158×136×19cmの東側が尖り気味になる土坑。北壁下には20×30cmほどの縫を開く。S C06、S K34を切る。土師器皿・椀、黒色土器A類椀、高麗青磁碗など16片ほどが出土。

S K34 ほぼ南北に長軸をとる210×120×20cmの梢円形状土坑。土層のあり方はS K33とは同じ。S C05、S C06を切り、S K33に切られる。

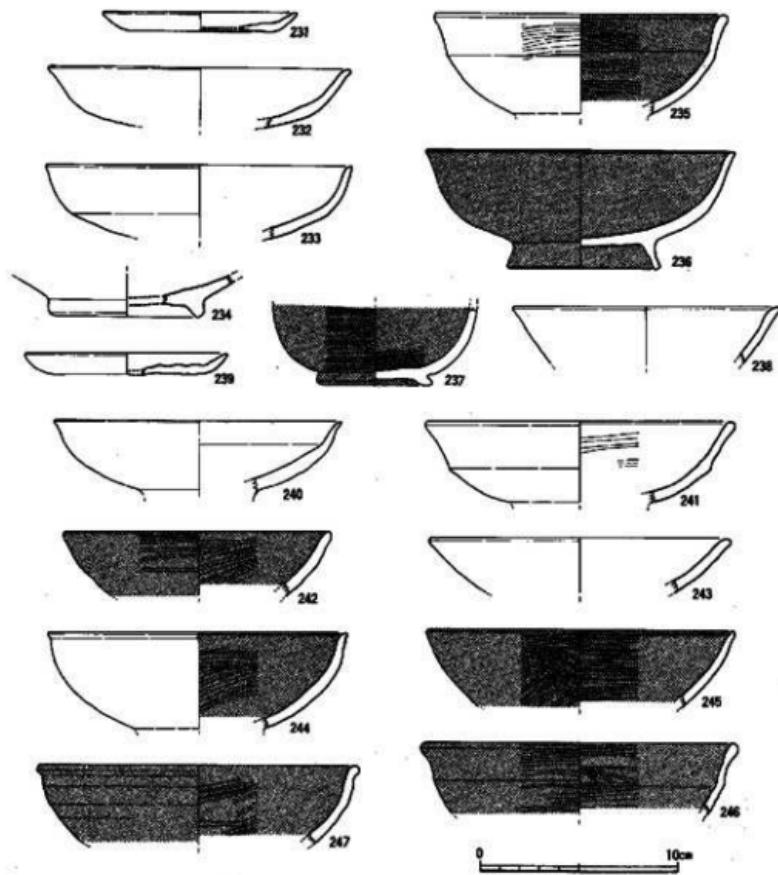
出土遺物 (第31図247) 復元口径16.0cmの黒色土器B類椀。外面のヘラ磨きは磨滅して不明瞭。他に土師器皿・椀、黒色土器A類椀などの細片が少量ある。

S K35 (第30図) 93×87×23cmの南北にやや長い方形土坑。覆土は一部灰の混る灰褐色土一層。底面付近から土師器、黒色土器だけが50個体ほどまとまって出土した。S K36を切る。

出土遺物 (第32図) 248~256は土師器III。口径は10.0~11.2cmで、多くが10.2cm前後となる。器高は1.6~2.3cm。底部はすべてヘラ切りで、250と254には板状压痕が残る。257、258は土師器杯。法量に違いはあるが口縁端部の作り方、ヘラ切りの後の板状压痕が残るなど共通点もある。257の口径12.2cm、器高4.3cm、258の口径15.4cm、器高4.6cm。259~264は土師器椀。器面調整は横ナデとナデ。263は厚めの器肉で、口径13.0cm、器高5.0cm。264は口径14.4cm、器高5.5cm。265~269は黒色土器A類椀。小片の268を除けば、復元口径13.6~14.8cm。268、269の内面は磨滅する。265、267、268は外面にもヘラ磨きが認められる。270、271は黒色土器



第30図 SK34・35・36・37・38・40・43・45実測図(1/40)

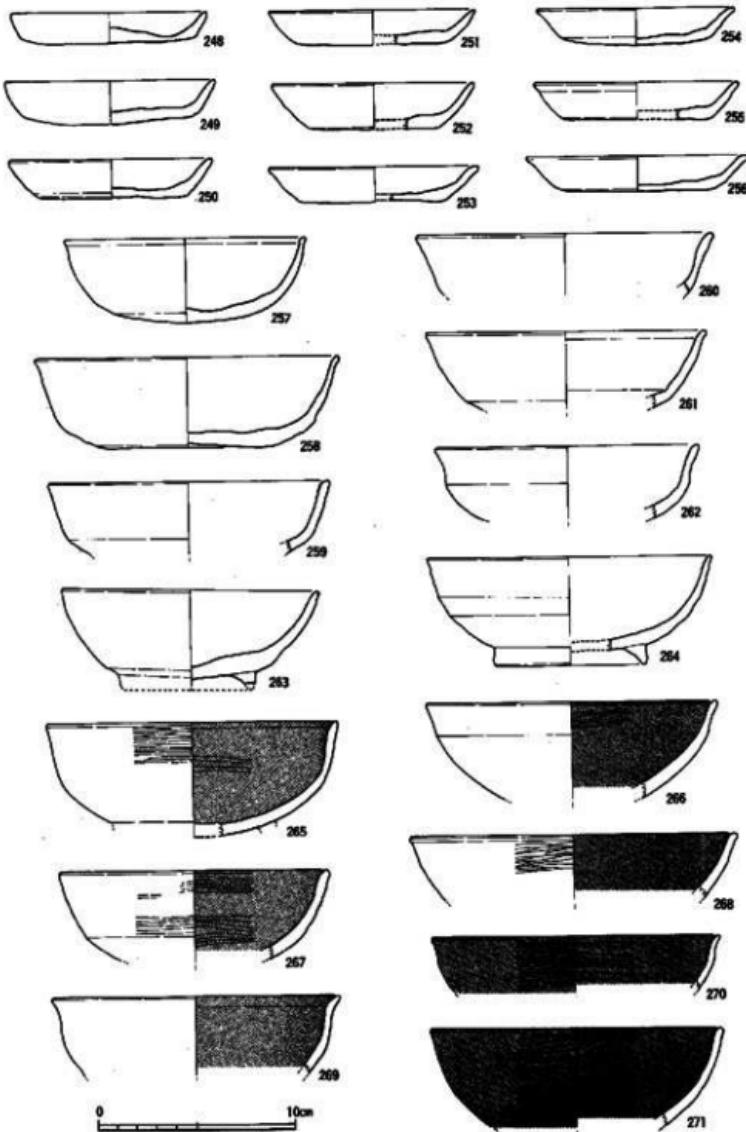


第31図 SK05・06・08・09・11・15・17・19・23・34出土遺物(1/3)

B類椀。内外面ともヘラ磨きし、黒くいぶす。復元口径14.6~14.8cm。口縁の作りに相違がある。

S K 36 (第30図) 132×112×35cmの東西に長い楕円形土坑。S D 34を切り S K 35に切られる。土師器皿・椀・甕、黒色土器A・B類椀などの細片が40ほど出土。

S K 37 (第30図) 西側に開く平面をもつ140×130×22cmの不整形土坑。覆土は上に黄褐色土があるものの、ほとんどは暗褐色粘土となる。土師器皿・椀・甕、黒色土器A・B類、須恵



第32図 SK35出土遺物(1/3)

器杯などの細片50余が出土。

S K 38 (第30図) 長軸を東西にとる長方形土坑。183×72×30cm。東南角には20×15cmの縛がある。S D 36、37溝を切っている。形態からすれば土壙墓であろうか。土師器皿・椀、黒色土器B類椀・甕などの細片30余が出土した。

S K 39 西側調査区外にかかる。残存幅74cm、深さ6.5cm。円形か。土師器細片などが出土。

S K 40 (第30図) 西側が調査区外にかかるが、長方形土坑であろう。幅84cm、深さ32cm。形態からすれば土壙墓の可能性もある。土師器皿・椀、黒色土器B類椀などの細片が30片ほど出土したにとどまる。S D 38を切っている。

S K 41 145×90×20cmの南北に長軸をとる長方形土坑。S C 02に切られる。縄文土器1片だけが出土したにとどまる。

S K 42 S C 02に大半を切られ、東一南側部分しか残存しない。南北に長軸をとる梢円形になるものか。深さ13cm。土師器皿・椀、黒色土器B類、あわせて4片のみが出土。

S K 43 (第30図) 南北に長軸をとる143×67×23cmの長方形土坑。形態からすれば土壙墓の可能性もある。

出土遺物 (第34図272) 復元口径15.2cmの土師器椀。残存部横ナデ調整。遺構上面からの出土。他に土師器皿、黒色土器A・B類椀、須恵器などの細片が少量ある。

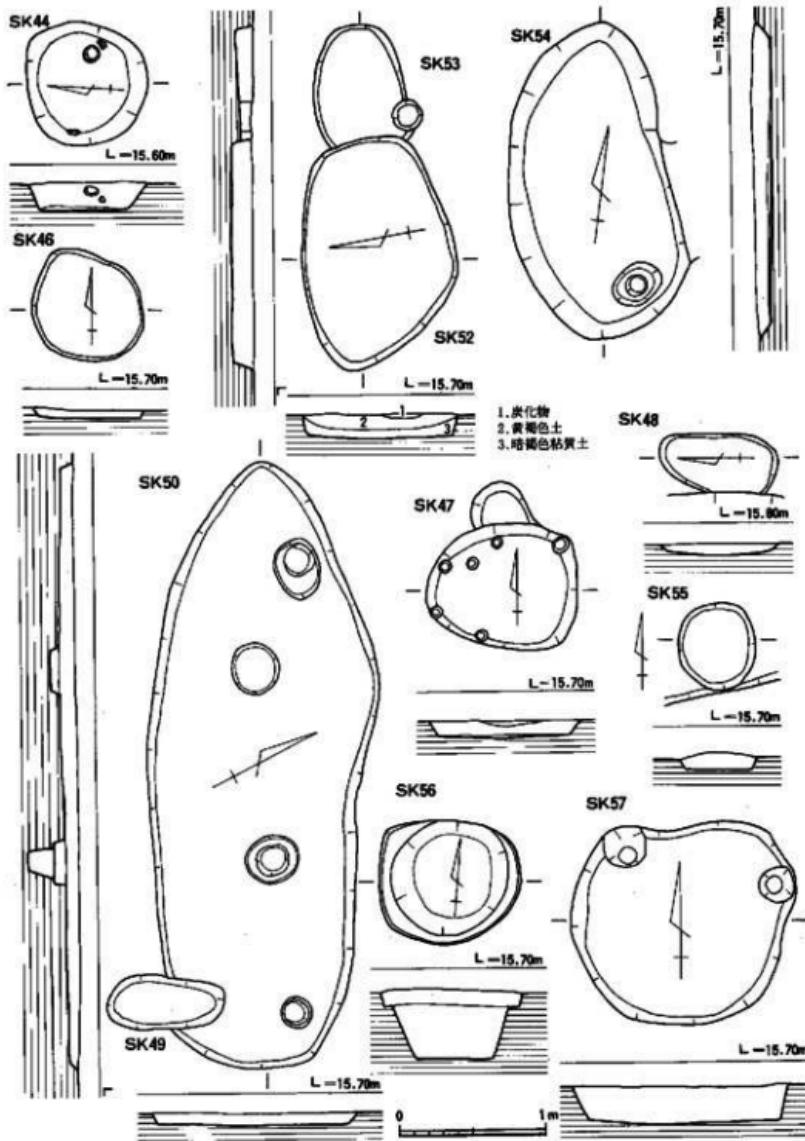
S K 44 (第33図) 径82~85cm、深さ20cmの円形土坑。

出土遺物 (第34図273~277) 273~276は土師器。273は高台付皿で、口径10.7cm、器高2.5cm。底部には板状圧痕が認められる。274、275は皿。口径10.6~10.8cm、器高2.1~2.3cm。底部はヘラ切り。276は椀。内外面ともヘラ磨きを行う。復元口径14.6cm。277は黒色土器B類椀。内面および外面にヘラ磨きを施すが、全体に磨滅著しく不明瞭。この他土師器甕、黒色土器B類椀、越州窯系青磁の細片が少量ある。

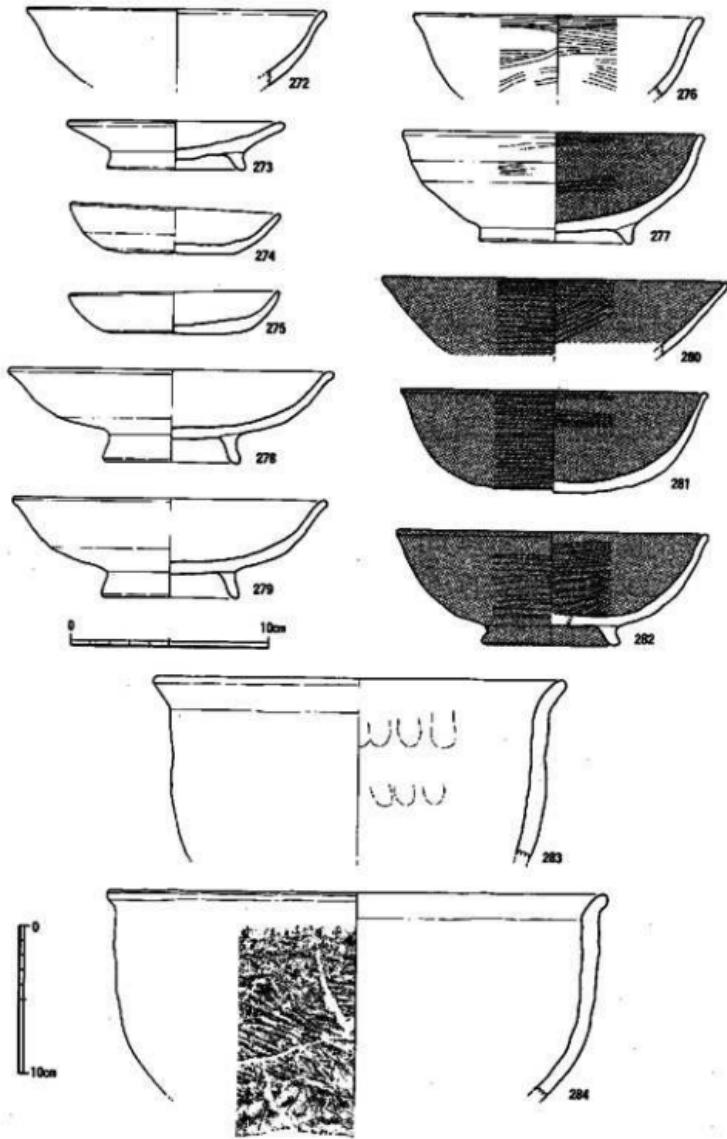
S K 45 (第30図) 西側が発掘区外に延びる。南北幅275cm、深さ92cmの方形状の大型土坑である。他の土坑に比べ、ほとんどが破片ではあるが、遺物の量・種類が多い。

出土遺物 (第34図278~284) 278、279はほぼ同様の形態をなす土師器椀。横ナデ調整。復元口径15.8~16.4cm、器高4.7~5.0cm。280~282は黒色土器B類椀。280の体部は直線的に開く。いずれも内外面ともヘラ磨き。ただ281の内面は磨滅で不明瞭。282は復元口径15.6cm、器高5.8cm。283、284は土師器の甕あるいは大鉢。ともに器内が厚く、口縁端部を短く外反させる。また外面には煤が付着する。284の外面はタタキが残る。復元口径は283が37.3cm、284が43.4cm。この他土師器皿、黒色土器A類椀、瓦器、須恵器、白磁II・IV類、陶器壺、格子目瓦などの小片一細片が少なからずある。

S K 46 (第33図) 径75cm前後の円形状土坑。深さ7cm。土師器皿・椀、黒色土器A・B類椀の細片51と鉄滓が出土した。



第33図 SK 44・46・47・48・49・50・51・52・53・54・55・56・57実測図(1/40)



第34図 SK43・44・45出土遺物(1/3,1/4)

S K47 (第33図) 105×75×13cmの東西に長い梢円形土坑。北側で浅いピットを切る。底面には径8cm前後の小穴が6ヶ所認められる。土師器皿など細片2のみが出土。

S K48 (第33図) ほぼ南北に長軸をとる土坑で、長さ82cm。西南側はS C03で切られる。深さ8cm。土師器皿・椀、黒色土器A・B類椀など16細片が出土。

S K49 (第33図) 80×38×11cmの南北に長軸をとる梢円形の小土坑。S K50を切る。土師器皿・椀、黒色土器A・B類椀の細片4が出土。

S K50 (第33図) 415×55×11cmの東西に長い砲弾状形の土坑。東南隅をS K49に切られ、S B20と重複（先後関係不明）する。底面は平坦。土師器皿・椀の細片3だけが出土。

S K51 径98cm、深さ7cmの円形土坑。西側はピットに切られる。土師器皿・椀、黒色土器A類など9細片が出土。

S K52 (第33図) 東西に長軸をとる160×106×16cmの不整方形土坑。上層には炭化物が混る。東側でS K53を切る。土師器皿・椀・甕、黒色土器A・B類、S K17出土と同じ白磁碗など39細片が出土。

S K53 (第33図) S K52西側を切られる。南北幅61cm、深さ12cm。東西に長軸をとる梢円形土坑であろう。土師器皿・椀、黒色土器A・B類椀など細片7が出土。

S K54 (第33図) 西北-東南方向に長軸をとる梢円形土坑。206×105×7cm。東にS D27が接するが、先後関係は不明。土師器皿・椀、黒色土器B類椀など細片44が出土。

S K55 (第33図) 径53~59cmの南北にやや長い円形土坑。深さ12cm。S D28を切る。土師器皿・椀、黒色土器A・B類椀など細片32が出土。

S K56 (第33図) 上面は97×84cmの西側が角ばかり、東側が丸い形状を呈するが、深さ10cmでテラスを作り、そこから径80cmの円形となる。上面からの深さ48cm。土師器皿・椀の細片が少量出土した。

S K57 (第33図) 径135~145cmの不整円形土坑。深さ25cm。土師器皿・椀・甕、黒色土器A・B類椀などの細片が50箇出上。

4) 溝

上層で確認した溝はS D01~42の42条である。概要でも述べたように、このうちS D01は弥生時代、S D10は古墳時代の所産である。残りの40条は古代末に属すると考えられるが、その形態・規模・性格は多様である。a区を除いたb・c区の溝は南北、もしくは東西に走るものが多く、建物群と相關するものと考えられる。c区のS D13およびS D11とS D12は明らかに掘立柱建物に伴う溝である。またS D09とS D16はc区の建物群全体を方形状に囲繞する溝と想定することもできる。b区にもS D38のように小さな方形状の区画をなすものと、S D21のように大きな方形?区画を作る溝がある。しかし b区は遺構が錯綜しており、溝と建物との関係を求めるることはかなり困難である。また溝が深いものでも30cmに足りず、10cm未満のものも

かなり多い。後世いくらかの削平を受けたとしても、溝そのものはさほど深く掘られていなかつたことがうかがわれる。以下 S D01、10を除いた溝について出土遺物も含め簡単に触れておく。なお個別の遺構図は掲載していないので、付図1を参照されたい。

S D02 a区を斜断し調査区外に抜ける西南一東北溝。幅100cm、深さ15cm。S D03を切る。

出土遺物（第35図285） 越州窯系青磁碗。復元口径15.6cm、器高4.4cm。内面は片彫りと毛彫りで花文を描く。釉は灰色味の緑色で墨付以外に施される。器面には氷裂がある。胎土は灰色でやや粗い。底部外面には白色目跡があり、高台内側に焼台らしき破片が付着する。高台は大きく張る（図版14参照）。この他に繩文・赤生土器片が少量ある。

S D03 S D02に切られる長さ13m、幅80cm、深さ8cmの西南一東北溝。出土遺物はない。

S D04・05 a区北端にある円形状溝。幅40cm、深さ20cm。土師器皿・碗などが出土。

S D06 a区南端でS D02の東側を平行して走る溝。幅50cm、深さ20cm。出土遺物はない。

S D07 c区で検出した南北溝。南は調査区外に抜ける。幅50cm、深さ4cm。土師器皿・楕・黒色土器A・B類、越州窯系青磁などが出土。

S D08 a区からb区に走る南北溝。北側は幅・深さとも減じ、東北方向にカーブしてS D21に取りつく。c区中央で幅60cm、深さ20cm。

出土遺物（第35図286～288） 286、287は黒色土器碗。286はA類で体部内面はヘラ磨き。287はB類で内外面ともヘラ磨き。外面は磨滅。復元口径11.0cm、器高4.1cm。288は白磁碗IV類。釉は灰白色、胎土は粗く黑色粒が混る。他に土師器皿・碗などがある。

S D09 c区南側からb区にのびる南北溝。北端で西へ1.5m溝が突き出て、約1mの陸橋の西にはS D16が続く。幅100cm前後、深さ15cm。土師器皿・碗、黒色土器B類碗などが出土。

S D11・12 c区S B06を西と南で囲む溝。S D11の幅70cm、深さ8cm。S D12は幅30cm、深さ3cm。土師器皿・碗、黒色土器A・B類碗などが出土。

S D13 c区S B09の南北に取り付く3条の溝。幅100cm前後、深さ10cm。土師器皿・碗・壺、黒色土器A・B類碗、須恵質土器、越州窯系青磁、白磁などが出土。

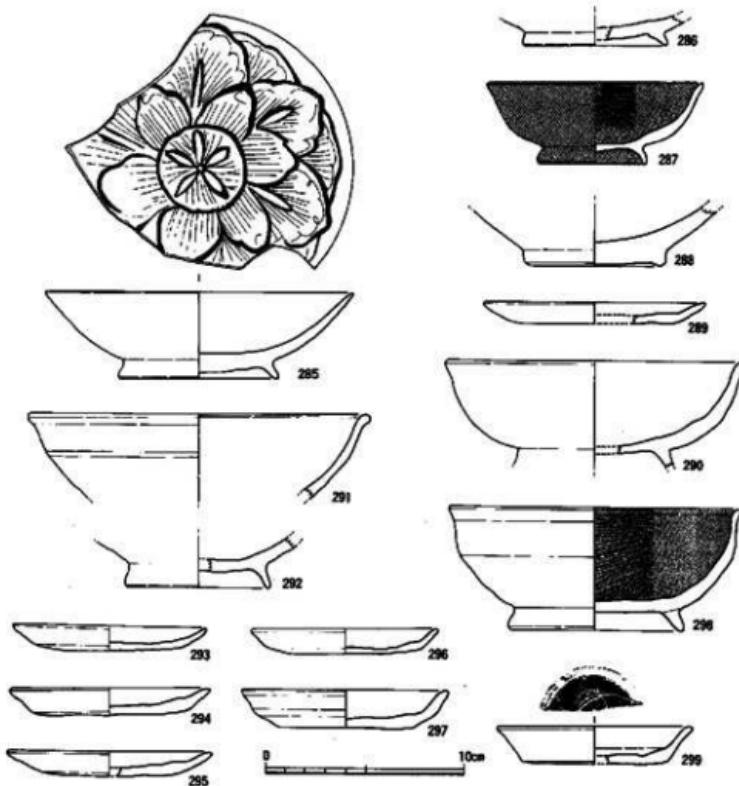
S D14 a区で検出した長さ7.5mの東西溝。西側に段がつく。東側で幅190cm、深さ15cm。出土遺物（第35図289～292） いずれも土師器。289は復元口径11.2cm、器高1.1cmの皿。底部はヘラ切り。残りは碗。いずれの体部も横ナデ。291は口縁部を外反させ、口縁部内側と体部外面中央に沈線を入れる。復元口径17.0cm。他に黒色土器A・B類、白磁などがある。

S D15 c区。長さ5.2m、幅180cm、深さ10cmの南北溝。土師器、黒色土器の細片が出土。

S D16 b区南端の東西溝。幅90cm、深さ27cm。S D09と関連する溝か。土師器皿・碗・黒色土器A・B類碗、天目などが出土。

S D17 c区。長さ3.5m、幅40cm、深さ4cmの西南一東北溝。土師器、黒色土器が出土。

S D18・19・20 c区北側で東西に平行して走る長さ2.5～5m、幅30～50cm、深さ5cm前



第35図 SD02・08・14・37・39出土遺物(1/3)

後の3条の溝。S D20からだけ上師器壺、黒色土器A類椀、須恵器などが出土している。

S D21 b区中央を南北に走り、南側で東に折れ調査区外に抜けるL字状溝。幅50~150cm、深さ4~30cm。北側と東西溝部分は浅くなる。繩文・弥生土器片のみが出土。

S D22 S D09の北端から調査区外へ抜ける幅50cm、深さ10cmの東西溝。出土遺物はない。

S D23 b区南側から東北方向に14m走る。幅65cm、深さ6cm。S D21、22を切り、S D24に切られる。次に述べるS D24とともに相当時期の出土遺物はない。

S D24 S D23北側をほぼ平行して走る長さ14m、幅50cm、深さ15cmの溝。S D29を切る。

S D25 S D23の東側を南北に7m走る溝。幅70cm、深さ5cm。出土遺物はない。

S D26 b区東南端の幅40cm、深さ3cmの東西溝。土師器皿・椀、黒色土器A類などが出

S D27 S D26の北側にある長さ8mの東西溝。西端はS K54に取り付く。東側で幅60cm、深さ6cm。土師器皿、黒色土器A類椀、施釉陶器が出土。

S D28 S D28の北側を平行して走る長さ12.5m、幅80cm、深さ28cmの溝。西端はS D29に切られる。土師器皿・椀、黒色土器A類椀、須恵器、白磁などが出土。

S D29 b区。南北溝であるが、途中で東西方向に折れる。幅70cm、深さ10cm。S C03、S D24に切られ、S D28を切る。出土遺物はない。

S D30 b区中央を東西に走る幅100cm、深さ25cmの溝。造構の切り合い関係では最も古いものである。土師器皿・杯・椀、黒色土器A・B類椀、白磁椀、青白磁合子などが出土。

S D31 b区中央、逆L字状を呈する溝。幅150cm、深さ16cm。S D21、30を切る。土師器皿・杯・椀、黒色土器A・B類椀、白磁などが出土。

S D32 S D30の南側を平行する40cm、深さ10cmの溝。土師器皿、黒色土器A類などが出土。

S D33 S D32を切る南北溝。幅55cm、深さ13cm。土師器皿・杯、黒色土器などが出土。

S D34 S D30を切って東北に走る幅35cm、深さ10cmの溝。土師器、黒色土器などが出土。

S D35 S D34の東側にある長さ3.5m、幅35cm、深さ14cmの南北溝。土師器皿などが出土。

S D36 S D34の北端から走る幅50cm、深さ15cmの南北溝。S K38、S D40に切られる。土師器皿・杯・椀、黒色土器A・B類椀などが出土。

S D37 b区西側の北端部から中央部にかけて続く南北溝。幅1m前後で、南側は狭くなる。深さは南側が28cm、北側は10~17cmとなる。重複するすべての造構に切られている。

出土遺物（第35図293~298） 293~297は土師器皿。口径9.4~10.4cm、器高は297が1.9cm、他は1.3cm前後である。底部はすべてヘラ切りで、297には板状圧痕がある。298は黒色土器A類椀。体部内面はヘラ磨き、外面は横ナデ。復元口径14.7cm、器高6.2cm。他に土師器杯・椀、黒色土器B類椀などの細片がある。

S D38 S D37を切るF字状の溝である。南北溝部分の幅65cm、深さ29cm、南北2条の東西溝は幅40cm、深さ10cm前後。逆コの字状に開まれた部分に建物などは認められない。S D37以外の造構には切られる。土師器皿・椀、黒色土器A・B類椀などが出土。

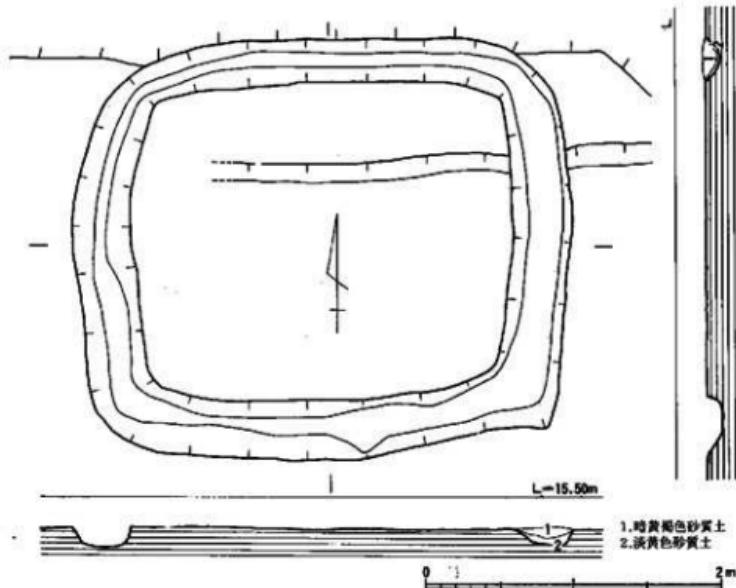
S D39 S D38の中にある東西溝。幅60cm、深さ16cm。

出土遺物（第35図299） 復元口径9.7cm、器高1.9cmの土師器皿。底部はヘラ切り。内底にはヘラ記号が認められる。他に黒色土器A・B類椀などがある。

S D40 b区中央にある短い東西溝。幅25cm、深さ5cm。S D21を切る。出土遺物はない。

S D41 b区中央を南北に走る溝。幅100cm前後、深さ16cm。S E10、S D21に切られる。土師器皿・杯・椀、黒色土器A・B類椀、越州窯系青磁などの小~細片がまとまって出土。

S D42 b区東側の長さ22.5m、幅50cm、深さ10cmの南北溝。土師器皿・杯などが少量出土。



第36図 SX101実測図(1/40)

5) 方形周溝遺構 (第36図)

S X 101の1基をa区西側で検出した。東西340cm、南北282cmと東西に長軸をとる。溝幅30~40cm、深さ15cm前後。方形部内側で東西260cm、南北215cmをはかる。溝の断面はU字形で、暗黄褐色砂質土が主な覆土であるが、西側中央、および南側中央には炭化物が認められた。方形内側には何らの遺構もみられない。周溝から土師器細片が少量出土したのみである。形態などからすれば墓地の可能性もある。

6) その他の遺構

以上述べてきた遺構の他に不整形の落ち込み状遺構や、旧河川を検出した。簡単にその概要を述べる。

不整形落ち込み遺構 c区でS X 103とS X 104の2基を検出した。いずれも浅く、出土遺物もない。

旧河川 b区南側で検出した。6条の川（自然流路）が蛇行して、北あるいは東北方向に走る。縄文・弥生土器が出土しており、また上層面では埋没していることから弥生時代以降11世紀以前の流れと考えられる。

6 おわりに

田村遺跡群では1978年以降、1989年末までに9次にわたる発掘調査が行なわれてきた。特に1980年から始まった市営田村団地建設、および1985年の市立田村小学校建設に伴う調査は、遺跡群の南半を中心にして4万m²を越える大規模なものであった。検出した遺構・遺物は縄文時代早期から江戸時代に至り、その性格・種類も多様であった。1次調査以前は全く知られていなかったこの遺跡群が、開発そして破壊の見返りとしてであるが、このような結果をもたらした意義は、単に早良平野の歴史の解明にとどまるものではない。しかし残念なことに、各地点の事実報告に忙殺され、この遺跡群全体の考察を行うことができない。それは今後の大きな課題とし、ここでは第4次調査の平安時代後期の集落について簡単なまとめを行ないたい。

検出した集落は掘立柱建物、井戸、土坑、溝などから構成され、a、b、c各区ごとに3つの群をなす。建物の規模は2×3間の身舎を越えることはなく、SB07の四面庇をもつものが全体的には大きな部類に入る。これがa区では5棟、b区では8棟、c区では10棟確認されている。もちろんまとめきれなかった建物もあるものと考えられ、また建物どうしの重複があることから、一時期の集落構成単位には若干の増減があろう。a区の集落は西南に、c区では中央に広場と考えられる空間をもつ。これに対し b区では総柱の建物が集中し、総柱でないSB22・23は内部に土坑をもつ可能性が高い。また1~2棟単位で溝に囲まれている様子がうかがわれる。これは居住のための建物群であるa、c区と明らかに異なり、工房および倉庫群であった可能性が高い。a、c区に倉庫に相当する建物がみられないことからすれば、b区に集中して管理されたものであろうか。

出土した遺物のうち、上師器皿・杯の法量および糸切り底が認められないこと、また黒色土器がほとんどの遺構から出土すること、さらに輸入陶磁器の特徴などから、この集落の時期は11世紀代に求められる。これは先に調査した第3地点の集落形成とよく似、やはり11世紀代に始まり14世紀まで続く第10地点の集落のあり方と異なる。12世紀はじめには条里地割りに沿った大溝が田村遺跡群で検出されており、これに伴う農地拡大が、他地点の集落を第10地点の集落に集約させたものであろうか。第10地点には他地点の主体である2×3間の身舎を凌駕する建物が多く検出されており、ここが田村遺跡群での拠点集落であった可能性が高い。

この11世紀に突如として平野中央部に集落が築かれるのは、莊園の拡大化と無縁ではあるまい。具体的に野芥荘としてこの遺跡群をみなす考え方もあるが、地理的な近さを除けば具体的な確証を欠いている。しかし集落形成時から、輸入陶磁器の多量出土からうかがわれるよう、強力な所領者がこの集落の背景にあったものと考えられる。さらなる遺構・遺物などの検討を通して追求すべき課題である。

図 版



1. a 区上層全景（西から）

2. a 区下層全景（東から）

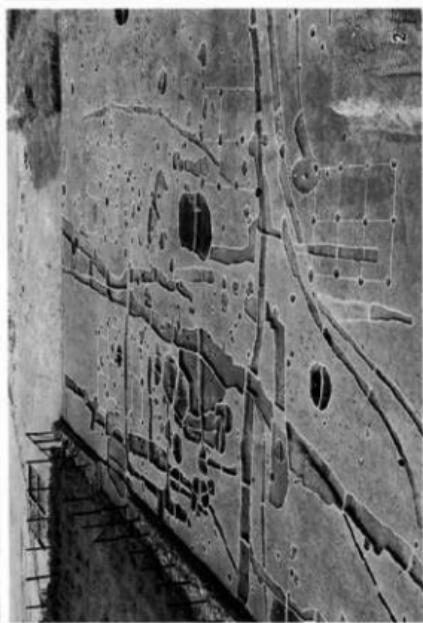
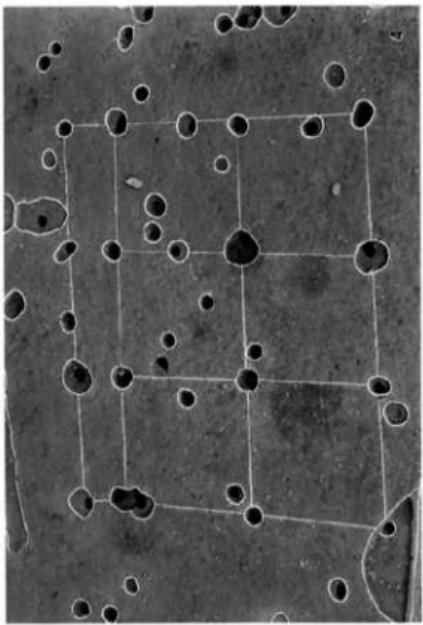
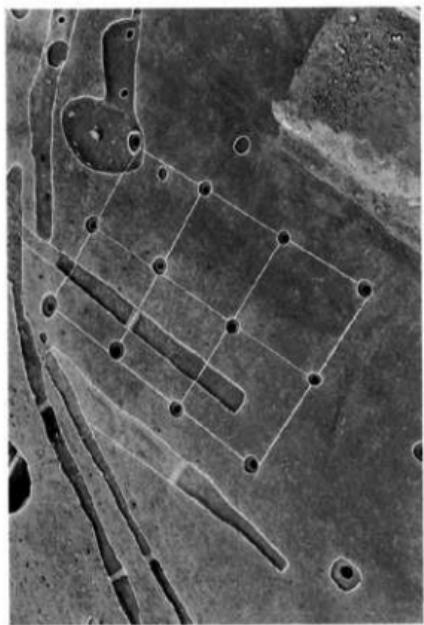


1. b区上層全景（北から）

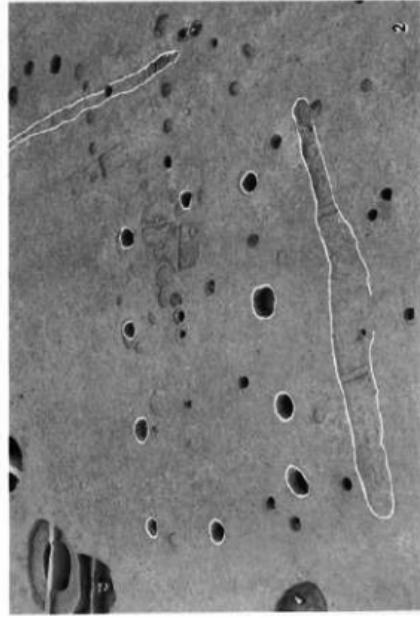
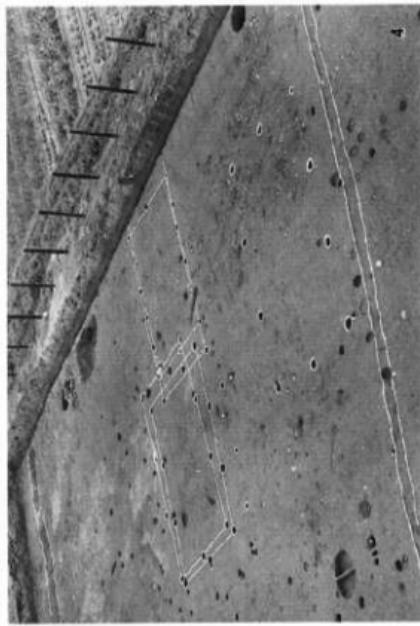
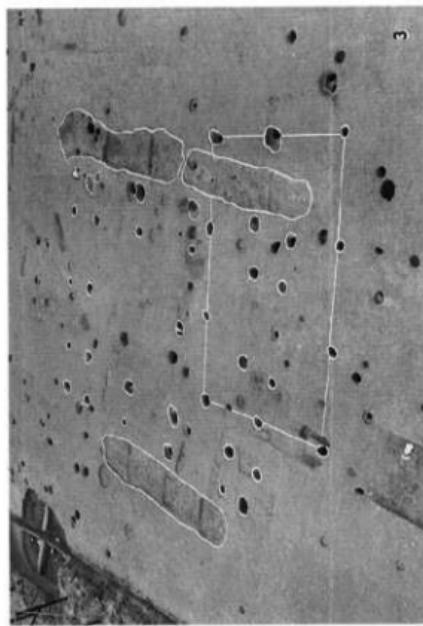
2. b区下層全景（南から）



1. c 区上層全景（西北から） 2. c 区上層全景（東から）



1. SB01・02・03 2. b 区掘立柱建物群 3. SB16 4. SB18



1. SB22・23 2. SB06 3. SB09・10・11・12・15
4. SB07・14



1



2

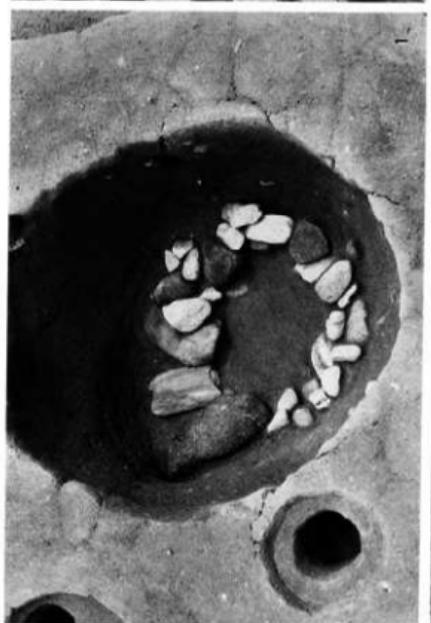


3

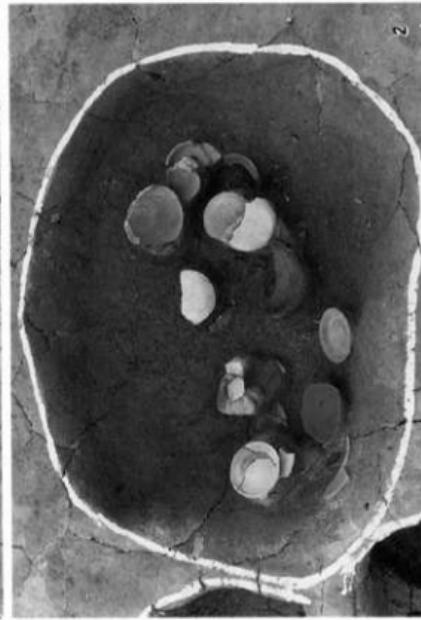
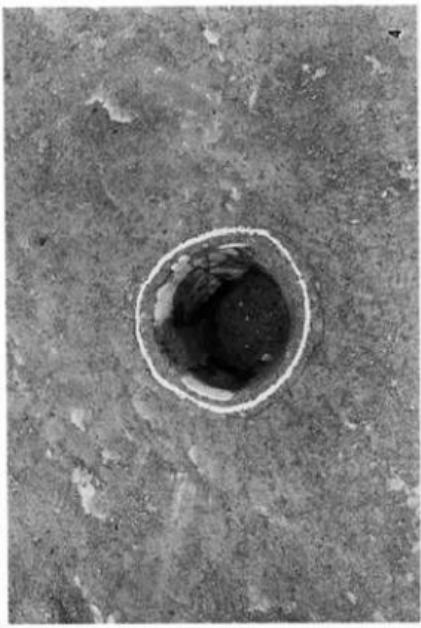
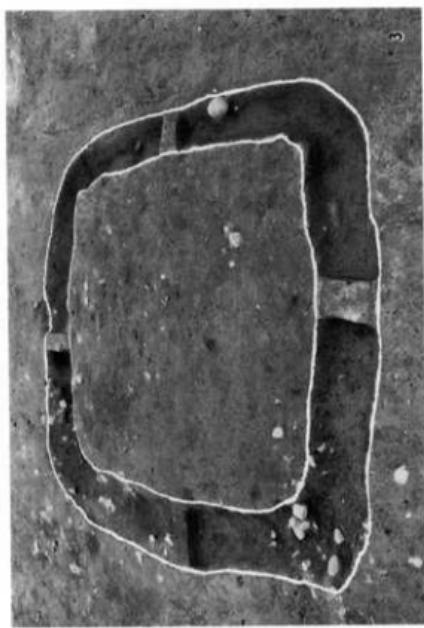


4

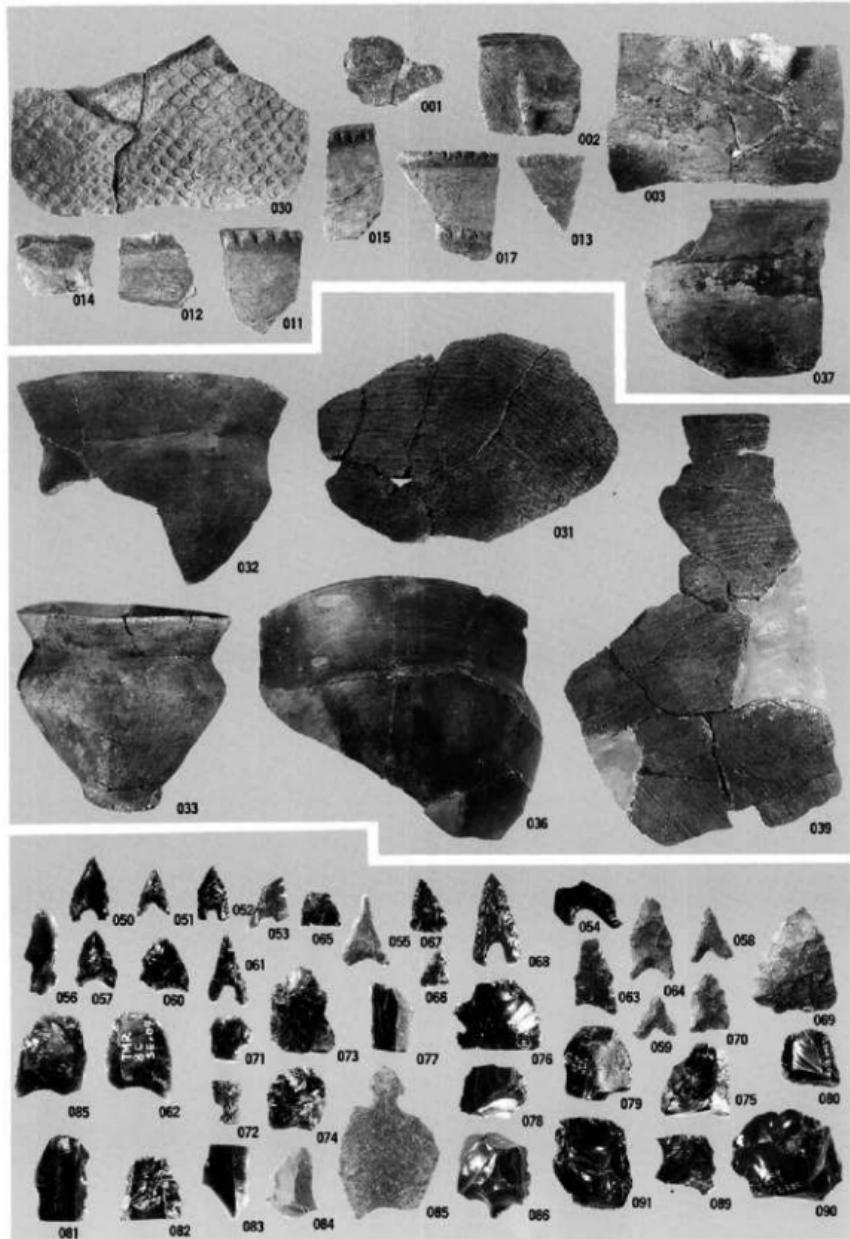
1. SE01 2. SE02 3. SE03 4. SE04



1. SE11 2. SC01 3. SC02 4. SC03

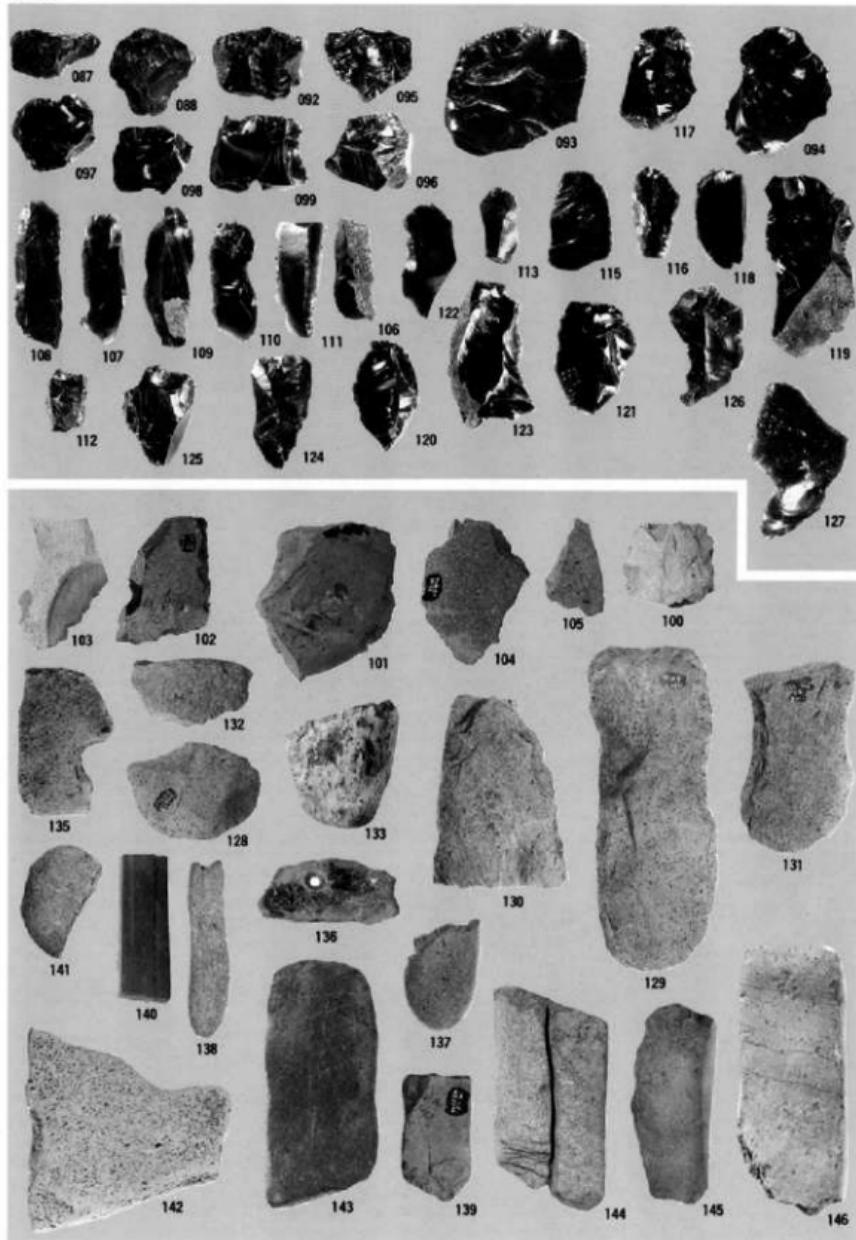


3. SX101 (方形周溝遺構) 4. SX02 (円窓)



出土遺物 I (1/1, 1/2, 1/3, 1/4)

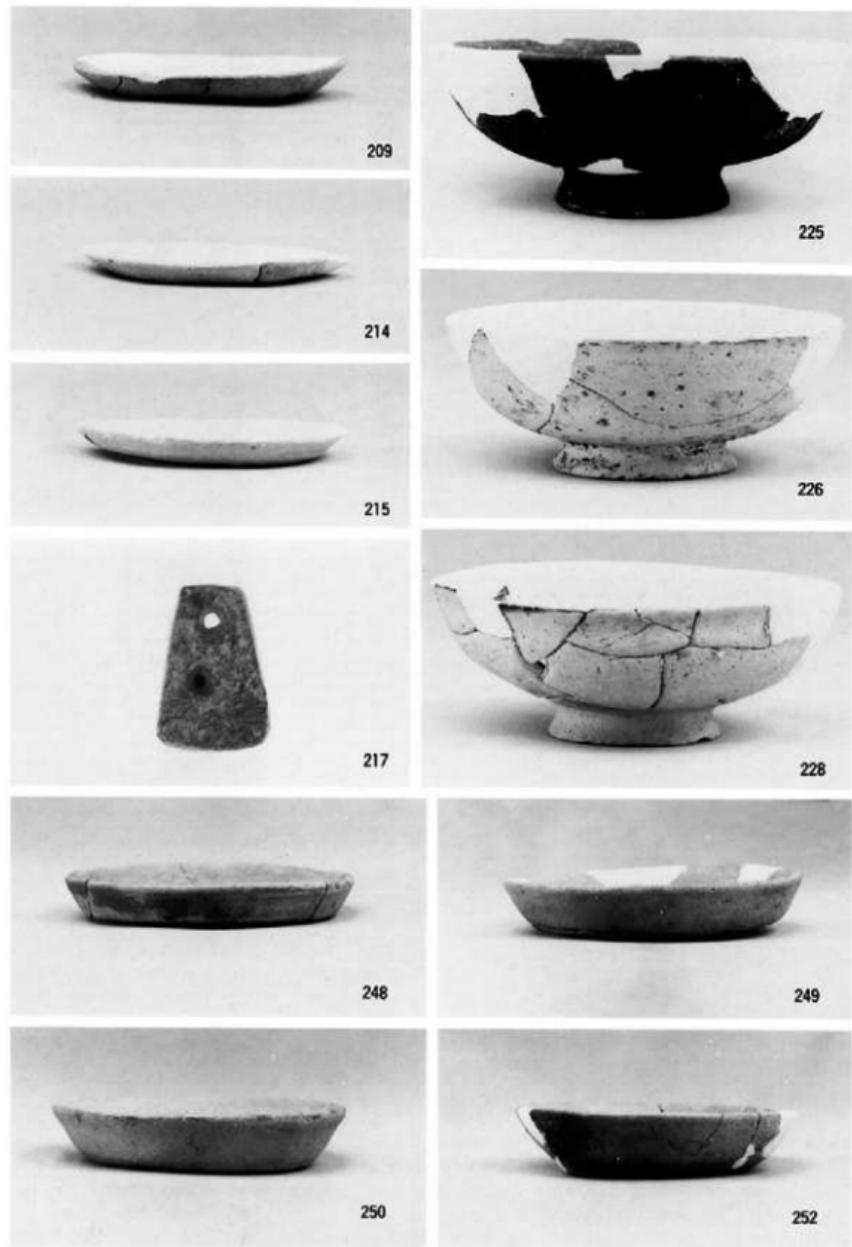
図版10



出土遺物Ⅱ (1/2、1/3)



図版12



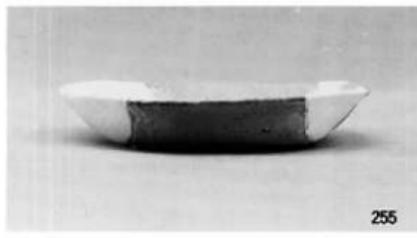
出土遺物IV



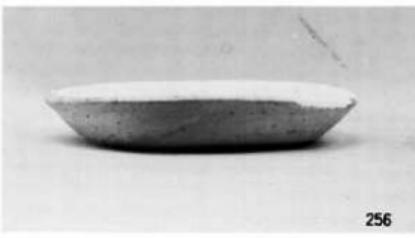
253



254



255



256



257



258



274



275



273



277

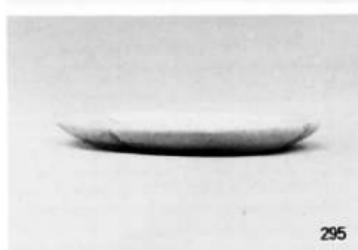
図版14



287



294



295



285



出土遺物Ⅳ

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第216集

田村遺跡 一VI一

1990年3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 祥文社印刷株式会社

福岡市博多区博多駅南4丁目15番17号
